

鳴門秘帖

剣山の巻

吉川英治

青空文庫

きつちよう
吉兆 吉運
きちうん

それから四、五十日の日が過ぎた。
暑い。

南国らしい暑さの夏！

雄大な雲の峰の下に、徳島の城下は、海の端はしに平たく見えて、瓦かわらも焼けるようなギラギラする陽ひに照らされている。

カチ、カチ、カチ！ たえまのない石工いしくの鑿のみのひびきが、炎天にもめげず、お城のほうから聞えてくる。町人の怠惰たいだを鞭むちうつようだ。

徳島城の出丸でまるやぐら櫓は、もうあらかた工事ができている。今は、いつか崩壊ほうかいした石垣の修築しゆしゆが少し残っているばかり、元氣のいい鑿のみの音は、そこで火を出しているひびきである。

あわのかみしげよし
阿波守重喜も、その後、めつきり快方かいほうに向つていた。

ひと頃、家臣たちが眉をひそめた、病的な乱らんぎよう行やも止まって、今では、神経衰弱のかけもない程、まっ黒に日にやけている。

あまたの若侍と一緒に、徳島城の大手から津田の浜へ、悍馬をとばしてゆく重喜の姿をよく見かける。

水馬、水泳、浜ではさかんな稽古である。ある時は、家中をあげて、陣練、兵船の稽古などが行われた。

今日も阿波守は、水襦袢に馬乗袴をつけたりりしい姿で、津田の浜のお茶屋に腰をすえ、生れ変ったような顔を潮風に磨かせていた。

そして、白浪をあげて乗り廻している水馬の群れを眺めて、時々、ニツコとさえしている。

健康とともに、強い希望の火が、かれの行く手によみがえってきていた。赫々としてきた。

潮音、海風、すべて討幕の声！　そう胸を衝つのである。

炎日、灼土、すべて回天の熱！　そう感じられてくるのである。

健康な心には、迷信の棲みうる闇はなかった。間者牢のことも俵一八郎の死も、阿波守の脳裏からいつか駆逐されて、その後には、ただ大きな望みだけが占めていた。

（ことに）

もう五十日ほど前に、沼島ぬしまの沖合で、法月弦之丞のりづきげんのじょうとお綱とが、暴風雨あらしの狂瀾を目がけて身を躍らせたので、とうとう、それなり海のもくずになつたであらうという三位卿の報告は、かれをして、ホツとした息をつかせたに違いない。

「幸さい先せきはよいぞ！」

阿波守の意気があがるとともに、出丸曲輪でまるくぐるわの工事は成り、石垣の普請ふしんは近く手を離れるばかり、火薬は硝薬庫しょうやくぐらにみち、兵船はそろい、家中の士気は揃つてくる。すべてが、不思議なほどトントン拍子に吉事を重ねてくる。

近くは、前もつて盟約のある京の代表者、徳大寺家とくだいじの密使をはじめ、加担の西国大名、筑後ちくごの柳川やながわ、大洲おおすの加藤かとう、金森かなもり、鍋島なべしま、そのほかの藩から、それぞれ使者が徳島城に集まつて、幕府討て！ 大義にくみせよ！ の最後にして最初の狼火のろしをあげる謀しめしあわせをすることになつている。

で、阿波守の爽さわやかな胸から、時々、明るい笑いが頬へのぼる。波を見ては笑えみ、人をみては笑み、馬をみては笑む。

「阿波殿！」

と、お茶屋の端にかけている三位卿が、それを見て声をかけた。

「ウム、何か？」

「愉快でござりますな」

「心地よいの」

「若侍たちの水馬も、日に日に上達してまいります」

「蜂須賀武士じゃ！」

「南蛮鉄なんぼんてつのような皮膚——」

「あれへ具足ぐそくを着込ませたら、よもや江戸の青ひよろけた侍どもにひけはとるまい」

「いいながら阿波守、ふと、有村ありむらのうしろにかがんでいる二人の見なれぬ侍に目をつ

けた。

「あれにいるのは何者か？」

と、重喜が妙な顔をした。

ひとりひとりは頭巾をつけ、ひとりひとりは総髪そうはつ。どちらも大名の前に出られる風姿なりではない。

「もと川島郷かわしまごうの原士はらし、関屋孫兵衛です」

と、待つていたように、有村がひきあわせた。

「ひとりには旅川周馬という浪人、一角にも劣らず、弦之丞を討つについて骨を折りました」
 「ウム」

重喜は鷹揚おつようにうなずいた。

さきに、天堂一角から推挙があつたので、その名前だけは耳にしていた。

有村は、お言葉をたまわりたいと願つた。そして、関屋孫兵衛は、某所で果し合いをし
 た折の刀傷かたなきずを病んでおるので、頭巾のままおゆるしを願いたいとつけ足した。これは、
 三位卿も真偽を知らないことだが、孫兵衛のいうままを取次いだのである。

で、機嫌のよい阿波守は、謁えつをゆるして、当座の手当を与えるように近侍きんじへいつけた。
 納戸方の侍の手から、金一封ずつが渡された。

すくない金ではないらしい。

「なお、いずれ後日には、何かのお沙汰があるであろう」

ということに、周馬も孫兵衛も予期どおりなつぽへ来たわえと、内心ニタリとして、殊し
 勝ゆしよつらしく引退つた。

だが頭巾のことでは、さすがなお十夜も冷汗をかいたらしく、腋わきの下を拭きながら、周
 馬とくすぐつたがりながら、空いている浜小屋のひとつへ入ってくる、とそこに天堂一角

が、水襦袢じゆばんに馬乗袴ばかまの姿で、腕をくんで鬱ふさいでいた。

「お」と、顔を見あわせて、

「どうした」

と、肩を叩く。

「う……」と一角は元気がない。

「水馬で疲れたとみえる」

「そうでもない」

「今、阿波守に拝謁はいえつしてきた」

「ふーん……」

「貴公の推挙もあり、三位卿の口添きえも利きいて、すっかり面目をほどこしたというわけさ」

「そうか」

「よろこんでくれ」

「うム」

「おれも川島へ帰って、元の原土千石の身分になれる。周馬だって、いずれ、近習とまではゆかなくっても、馬廻りやお納戸ぐらいには役づくことになるだろう」

「早いな、話は」

「とにかく、吉運到来だよ」

「そうかしら」

「オイ、一角」

「え」

「そうかしらつて、お前めえだつて、噂うわさにきけば、たいそついい運が向いてきたというじゃね
エか」

「ウム、加増かぞうのお墨すみ付つきをいただいた」

「不足なのか」

「過分さ」

「じゃあ」

少し話がこじれてきた。周馬が代つて、

「おれたちが仕官したり帰参するのが気にいらぬのか」
とひがんでいう。

「ばかをいえ！」

と一角は傲岸ごうがんになった。

「お互いに立身出世の緒いとぐち口くちがついたのを、誰が気にいらぬ奴がある」
「それならよろこんでしかるべきじゃないか」

「だからよろこんでおるではないか」

「ちツ、まづい面つらをしているくせに」

「ほかに屈託くつたくがあるからだ」

「なんだ？」

「おれは少し気になってきた」

と一角はまた首をたれて考えこんでしまった。

「どうしたつていうんだ。天堂一角にも似合わん憂鬱ううつじゃないか。今、蜂須賀家もおれたちも、吉兆と吉運にめぐまれてるのに」

「だからよ、その夢が凶わるく、裏切られてきやしないかと心配しているのだ」

「妙なことをいう……」

解げせない。

ふたりは眉をひそめて一角を見た。一角は何か真剣になって苦念くねんしていた。

剽悍ひょうかんで一徹者、何ごとにも荒けずりな性格を見せる天堂が、妙に楽しませぬ色で、考

えこんでいるので、周馬と孫兵衛がだんだんたずねると、やつと、口を開いた。

「どうも、吾々の吉運到来は夢らしいぞ。夢はいいが、さめた後の悪さが思いやられる」と、何かに、おびえていうのである。

「なぜ？」

「どうも、弦之丞とお綱は、まだ死んではおるまいと思われる。もし、ふたたびかれが姿をあらわすことでもあった日には、殿を欺だましたことになる」

「ばかな！」と周馬は一蹴して、

「あの怒濤どとうの中へおどりこんで、助かるわけがあるものか」

お十夜も同意した。

「一角、そりや、余りお前めえが考え過ぎるよ」と。

そして、もう一言ひとこと、冷笑をまげてつけ加えた。

「運が向くと人間は臆病になる。金持になると病氣ばかり怖くなる、この夢がさめるな、この夢がさめるなつてやつよ。それと同じだ。ばかばかしい。夢といつてしまえば、棺桶

の底へあぐらを組むまでは、みんな夢じやないか」

「くだらんことをしゃべってくれるな、拙者は心の底から心配しているのだ。恩賞の帰参のと、吉運に酔っている貴公たちを見るといつそう後が思いやられる。決して、根柢こんていもなく取越し苦労をしているのではない」

「どうして急にそんなことを考えだしたのか。おれたちにはおかしくってしようがない」「実をいうと、拙者も、今しがたまでは得意だった。で、今日この浜で出会った叔父貴にも自慢をしたくらいなのだ」

「ウム」

「叔父というのは水泳指南しなんばん番で、赤組頭あかぐみがしら、生島流いくしまりゅうの達人で、平常へいぜいは船預かりという役名で四百石いただいている、海には苦労をしている人間だ」

「成瀬銀左衛門なるせぎんざえもんのことではないか」

「そうだ」

「その成瀬に自慢をしたというのは、法月弦之丞のことをだな」

「刃やいばで止めを刺したのではないが、とにかく、海の藻もくずになったことは分りきっておる。かたがたお墨付をいただいたから、それを話したのだ。さだめし、叔父にしても家中へ鼻

が高かろうと思つて」

「なるほど、そしたら？」

「おめでたい奴じゃ！ 頭からさうどなられたものではないか」

「ふうむ、変り者だな」

「どうして、常識過ぎるくらいな常識家だ。その叔父が苦にがりきつて、罵ばとう倒するのだから、拙者もちよつと面食らつた。——で理由を糺ただすと、法月弦之丞は決して死んではおるまい。必ずどこからか陸地へ上がつている！ 祝杯に酔ッぱらうなよ、阿波守様はいい時にはいい殿だが、悪い時にはその逆がひどく出るお方だぞ！ こう叱るのだ、拙者をな。で、だんだん叔父貴の説に耳をかしてみると、どうも彼はまだ生きていふという結論になつてくる」

周馬もお十夜も、なんだか嫌な氣持になつた。あまり正確な推理がそのあとから出るのが怖ろしく思えた。

「深いことはいわれないが、叔父は水泳と船術の経験から、近海の潮流に詳しい。また、みずから海へ飛びこんだ程の弦之丞だから、必ず自信があつたらう。相当にいける者なら、あの晩の波ぐらいは大したものではない。ことに隠密というものは、捕われるまでも決し

て自殺をしないものだ、拷問ごうもんにたえ、恥をしのび、首を斬られる最後の一瞬まで、生きて命をまっとうしようともかく粘り気ねばけのあるところに、隠密の本分と、かれらの誇りがある。その辺はなみの武士のいわゆる最期の美とはよほど違う。だから、弦之丞も、お綱を引つ抱えて海へ入ったのは、おそらく、逃げるだけの自信があつてしたことに違いないし、船も阿波の沖へ近づいていたといえ、かたがた油断ゆだんはなるまいというのだ」

「けれど、もう五十日あまり過ぎた今日になつても、かれがどこに潜伏していたという知らせも、ないではないか」

「その代りに、かれの死骸がどこへ流れ着いたということも聞かない」

「そういえばそうだなア……」と周馬の声は溜息ためいきに似てきた。

吉運到来の歓喜は苦もなくぐらつきだした。

そう疑いをもつてくると、弦之丞の変幻自在なことから推しても、ヒョツとすると、徳島の城下あたりを澄まして歩いていような気がする。

下手をすれば、浜で動いている足軽や人足、お城に取ツついている石工の仲間などに、かれが巧妙な変装をしていない限りもない。

「祝杯に酔っぱらうなよ！」

海で苦勞をした人間がいったという言葉が、気味わるく耳にこびりついてきた。

阿波守が浜から帰城した後で、三人は思案にあまつた顔を揃え、三位卿にどうしたものか相談してみた。

「ふうむ……」と聞いていたが、かれも専門家の成瀬銀左衛門がいった説というのでは、頭から否定もしきれないで、

「そういわれてみると、ほうつてもおけぬな」

と、同じ疑念にとらわれてしまった。

そして、またこういった。

「なにしろ万全を尽くしておくに限る。それには、第一案も第二案もあるから決して心配することはない」

翌日、かれは三名の者をつれて、すけとうまち助任町の代官所にきりいかくべえ桐井角兵衛をおとずれた。

「こういう者であるが」

と有村が、代官の角兵衛に示したのは、前夜、周馬が入念に描いた弦之丞とお綱の人相書で、骨格、年配、特徴、せたけ背丈などが、微細にわたっている二枚の巻半紙。

それをひろげながら、

「今から五十三日前の暴風雨あらしの夜から後に、こういう男女の死骸が、御領内の沿岸へ上がったことはないか。あるいは、無智の漁師りょうしなどが、曲者くせものに騙かたられて匿かくまっているような様子はないか、また、巧みに変装して御城下などにまぎれ込んでおるようなことはあるまいか、どうか、入念に至急、お調べを願いたい」

と、むずかしい注文を持ちこんだ。

桐井角兵衛は罪人の揚屋あがりやを預かり、手代手先の下役を使って、阿波全土の十手を支配している役儀上、いやとはいえないで、すぐに人相書を十数枚複写させ、それを美馬みま、海部いふ、板野いたの、三好みよしなどの各地の配下へ持たせて、しらみ潰つぶしに各村を調べさせた一方、代官所の手先に命じて、城下はいうに及ばず、阿波の沿海、残るくまなく搜索させた。

叩けばほこりの道理で、その結果いろいろな報告が集まった。だが、ひとつとして取るに足るような手がかりはなかった。

ただ、あの暴風雨あらしから数日の後、徳島より南の燧崎ひうちざきに、一枚の渋合羽が流れついたということと、まるで方角違いな、富岡郷とみおかごうの山林の中に、日数をへた男女の死骸が抱き合って朽ちていた、という二つの事実があつたが、それも深く探してみると、いずれも縁

のない暗合に過ぎない。

ふたりの消息は、依然として謎なぞであつた。求め得たものは、そういう偶然が起こさせる錯覚さつかくと、吉運をおびやかす疑惑、それだけである。

で、有村は、前から阿波守には内密に考えていた、第二の案を實行しようとした。それを天堂や孫兵衛や周馬に打ち明けると、三人も異議なく雷らいどう同した。

重喜しげよしに話せば、無論許されないにきまつてゐることであつた。許されないよりは或いは激怒を買うかもしれないと思つたので、秘密に出立しようとなつた。

山支度！ できうる限りの軽装で、竹屋三位卿以下、夜にまぎれて城下を抜けだし、劍山へ指して行つた。

お十夜孫兵衛だけは、久しぶりで、途中郷土の川島郷せうこうへ立ち寄りたといふので、それより一日前に立つてゐた。そして、後の者を川島で待ちあわせ、そこで、何かの手筈しめを謀しあわせる約束。

孫兵衛にしても木の股またから生れた男でない以上、川島へ帰つてみれば、老いさらばうた祖父だとか、顔を知らない甥おいだとか、麦畑でねじ伏せた女だとか、古い記憶の中から彼を取りまくさまざま人があつた。

だが。

故郷へまわる六部の気の弱り——で、お十夜がこの際寸閑をぬすんで、郷里をのぞいたことは、ようやくかれの放縦な世渡りと、そぼろ助広の切れ味に、さびしい臺が立つてきたのを語るものである。

「おれもこんどは落ちつくぜ。うム、御恩賞と扶持米を大事に守って、昔のとおり川島の原士となつて、この屋敷を建てなおすつもりだ」

周囲の者にも、こんな放浪児らしくない気持をもらした。

焼きが廻つたというものであるうか、それとも、人間らしいところへ落ちついてきたのであるうか、とにかく、吉運到来がだいぶ獐猛性を和けているのは事実だ。

「おれだつて、後生は安穩に送りてえからな」

といったところが本音であろう。

そこへ有村が来てかれを誘い、一行四人、吉野川の上流へと急いだ。

灼くような陽が、かれらの笠の上から焦りつけた。有村も一角も、袴の上から小袖を脱いで、白い肌着になつていた。柄頭の金具や刀の鐔も、手をふれると熱いほど焼けている。やがて仰ぐ行く手の雲と雲の間に剣山の姿がどっしりと沈んで見えた。

甲賀世阿弥こうがよあみのいる山だ。

全身の血とぎらん草の汁をしぼって、かれが孜々ししと書き綴つづっていたものは、もうどの辺まで進んでいるか？

三位卿たちは世阿弥が最後の仕事として、そういうことに魂を打ちこんでいるとは夢にも知らなかった。だが、ぜひとも、かれを殺してしまうことが、最善の手段だとは考えついていた。

いずれ、お綱は父に会うべく、また、弦之丞は世阿弥から阿波の内秘を聞きとるべく、剣山へ目指して行くことは想像される。だから、その二人がかりに生きているものと仮定しても、先廻りして、世阿弥の命さえ奪とっておけば、さまで驚くことはないではないか――

こう有村は考えたのであった。

そして、それを実行するために、四人は焼け土を踏んで剣山へ急ぐのだった。

へんろ
遍路の歌

鼬いたちのような鋭さをして、今朝、堀裏町へいうらまちの横丁よこちようを出てきた手先の眼八がんは、ツンのめ
るようなかつこうで、牢屋堀べいの下草たんへ痰たんつばを吐きかけながら、そそくさと、代官屋敷の
ほうへ急いで行つた。

それを見かけると、城下の者は、

「オヤ、何かまた朝ツぱらからお召捕めしとりがあるぜ、眼八が大股で行つた」

と、すぐに伝えあうほどの記録を持つているすごい眼八。

手拭でふくれている懐中ふところも、人一倍長い捕縄とりなわの束でアアなっているのだらうと恐こわが
られている手先である。

「お早う」

と、その眼八が門に立つた。

黒い冠木門かぶきもんの外から中へ、玉砂利が奥ふかくしきつめてある。城下代官と町奉行を兼
ねている桐井角兵衛きりいかくべえの役宅だ。

箒ほうきと打水で、役宅の前を掃除していた菖蒲革しやうぶがわの袴はかまと、尻おしはしよりの折助おりすけが、

「やあ、眼八」

と、朝機嫌のいい声を出して、

「ばかに早いな、何かあるのか」

と、竹箒を肩に立てかけた。

「ウム、ちよつと」

「相変らず隼はやぶさだな、いずれ大物だろう」

「それでもないが」

「町同心まちどうしんの田宮様たみやならば、もうあちらに詰めておいでになる、取次いでやろうか」

「田宮さんじゃ、少し相談相手にならねエことなんだが、お奉行はまだ——」

「まだお住居すまいのほうだろうよ」

「折り入って眼八が申し上げたいことがあつて起き抜けにまいりましたと、ひとつ、取次いでみてくれないか」

「いいとも」と、菖蒲革しょうぶがわのほうが、役宅の横を廻って、塀つづきの角兵衛の住居のほうへ様子を見に行った。

待っている間、眼八と折助は、何かの話の末に思いだして、

「そーいやあ、森の屋敷の宅助はどうしたろう？」

と、眼八からいいだした。

「あいつにこまごまと積もつて、十両ばかりの貸しがあるのだが」

「借金が首が廻らないところから、出先で随徳寺ずいとくじをきめてしまったんじゃないか」

「だが、主人の啓之助も、まだ御城下には帰っていないらしい」

「噂によると、何かマズいことがあつて、大阪表でお扶持ふち放れとなつたそうだ」

「へエ、森啓之助が？」

「なんでも浪人したという話だ」

そこへさつきの菖蒲革が帰つてきて、

「眼八、やはりお役宅のほうで待つていろとおっしゃつたよ、すぐにお越しになるだろう」

「ありがとうございます」

と、およその時間を計りながら、そこで、二、三服煙草を吸つてから、役宅の奥へ入つて行つた。

案内を知っている代官部屋を覗のぞいてみると、桐井角兵衛はもう机に積み重ねてあるいろいろな書類をめぐつてゐる。それがみんなこの間うちから八郡の地方代官所へ問いあわせをした、人相書の反響かと思うと、眼八は、なんとなくおかしくつて、しばらく、苦笑を押えていた。

と、それに気がついて、

「眼八ではないか、早朝から折り入って話したいこととは何だな」

と声をかけた。

「ごめんこうむります」

と、眼八は板縁にかしこまって、

「先日、竹屋三位卿のおいにつけで、ふれを廻しました法月弦之丞とお綱という女のございます」

「ウ、ウム」と膝をのりだして——「今朝も諸方から来ている書類に目を通しているのだが、ひとつとして確たる手がかりはない。ところで、何かそちの手で、めぼしいことが挙つたか」

「ちよつとばかり心当たりがございますので、それで、お指図をうけに上がりました」

と眼八は、煙管を抜いて、指に挟んだが、煙草盆が遠いので、その手を空しくさせたまま、しばらく言葉を切っていた。

「ふウム……：：：：そうか！」

と桐井角兵衛は、机に山積している各地の郡奉行の報告よりは、眼八が、煙草入れ

の筒と一緒に抜いた心当たりという一句に、すっかり引きずり込まれて、

「して、その二人の生死は？」

と、まず、訊ねた。

「奴らは、たしかに死んではおりません」

と眼八は、濁りのない声で、言いきつた。

ゆうべ、手先の眼八は、免許町の刀研師大黒宗理の店へ寄って、ある兇行に使われた小柄の目利をして貰っている間に、思いがけない拾いものにぶつかつた。

髪切虫のヒゲみたいに鋭いかれの感覚は、そこへ来た男と宗理の対話を二言三言聞いただけで、

「こいつあ!!」

と、思った。

職業的な興奮を超えて、一種の功名心に燃ゆる動悸さえうつつた。

この間うちから、阿波全土の代官や手先や町同心が、蚤取眼でたずねていても、な

お、その生死すら判定しない法月弦之丞という江戸方の隠密と、お綱という女を、ひとつ、

この眼八の手で、アツサリ引つくくつてみたら、節穴同様な目玉をもつて納まっている町同心や郡奉行などが、どんな面つらをするだろうか？

思ってみるだけでも痛快だ。乗り気になる値あたがある。

で、眼八。

その男が帰ったあとで、何食わぬ顔をして、宗理の口うらをひいて家へ戻ってきた。

寢床の中で、とつくりと前後のことを総合してみると、やはり弦之丞もお綱も立派に阿波へ入って、どこかにほとぼりをさましているという結論が生れてくる。

眼八は寝られなかった。

当たった富とみ札ふだをふり廻しているような興奮で一世一代の仕事だと考えた。初めは直接に三位卿のところへ持ち込んで、城内で羽振はぶりのきく若公卿に取り入ろうと胸算むなざんをとったが、それもあまり支配者を出しぬく形になるので、とにかく蒼惶そうこうとして起き抜けに代官屋敷へやってきたわけ。

それは桐井角兵衛にも寝耳に水であった。

「で、お前がいた時に、大黒宗理の所へ来あわせた男というのは、いったい、何者なのだ？ まさか弦之丞自身ではあるまい」

「そうです、無論弦之丞じゃありません、どこかこの辺の浜へ稼ぎに来ていた船大工の手間取まとり。そいつが研師とぎしの宗理の手から、研ぎ上がった二本の刀を受け取って帰って行きまし
た」

「船大工が？」

「へエ、しかし、ひとつは、無銘の長い刀やっ、ひとつは新藤五という小脇差で、すばらしい名作、鑿のみや手斧ちようななら知らないこと、船大工風情の手にある代物しろものでないことは分つていきます。で、頼み主はと台帳を見て貰うと、海部かいふの日和佐ひわさの宿、大勘だいかんという棟梁とうりようの名になつています」

「ふム、そして？」

「頼たのみ人の名に偽りのないことは、品物が大事な金目のものだけに、まあ、嘘はないと見ておきました。それに日和佐の宿あたりには、それ程の刀を研ぐ腕との研師はありますまいから、わざわざ徳島の城下まで持つてきたに違いありません。ことに、その刀もただの研とぎではなく、潮水浸しおびたしになつたのを、鞘さや、柄糸つかいと、拭ぬぐい上げまですっかり手入れをしないおし
たもので、宗理の手もとても五十日ほどかかったという話。——指を繰ってみると、ちよ
うど沼島沖ぬしまで四国屋の船が暴風しげをくつた日から四、五日後に持ちこんだ勘定になるんです」

「なるほど」

と、角兵衛もうなずいたが、

「だが、それだけの事実を押し、双腰ふたこしの刀を、弦之丞の持物であると断じるのは早計ではないか」

「そこにや、動かない証拠があるんです。というなあ、無銘の方の小柄こづかには、弦之丞の印しるしと聞いた三日月紋の切銘きりめいがあり、もう一腰の新藤五の古い鞆さやには、甲賀世阿弥よあみという細字いじが沈金彫ちんきんぼりに埋めこんであります。で、もうこれ以上の詮索せんさくは無用でしょう。すぐに使いの男をつけて、その場から日和佐ひわさへ突ツ走つてもいいところですが、大事を取つて一応ご相談に上がったわけです」

「ウーム、そうか」

桐井角兵衛にも、もう少しも疑う余地がなかった。

「日和佐の宿に潜伏せんぷくして、刀の手入れのできるのを待っているものとみえる」

「それと、これにや弦之丞をかくまっている奴が、ありそうですから、ただいきなり捕手をくりだしても、風を食らってしまうでしょう」

「とにかく、何より先に、このことを、有村卿のお耳に入れて、お指図をうけた後の手配

とするが順序であろう」

「あれが仕上がって届いたとすると、弦之丞はすぐにも日和佐にいないかもしれませぬ。どうか、ご相談に暇どつて、大事な機おりをはずさないようにお願いいたします」

にわかそうこうに蒼惶とした気持で、桐井角兵衛は使いをもつて、このことを城内の三位卿に知らせてやると、その有村は、きのう山支度をして、かねて望んでいた剣山の踏破に出かけてしまったという返辞。

「あれほど役人の手を騒がしておきながら」

と、かれの腹藏ふくぞうを知らない桐井角兵衛は、三位卿の行動を不快に思ったが、みすみす眼八がつきとめてきたものを、悠々と、有村の帰りを待つてはいられないので、かれは彼の独断で、日和佐へ手配することにきめた。

手先の眼八はわらじをはいた。

足は自慢な男である。

城下から海ぞいに、土佐街道を南へ十四里ばかり、日和佐の宿へ急いだのだ。

磯の香の高い海辺町うみべまちにはいった晩、かれの姿は、すぐと、海部代官所かいぶの中へ消えてい

た。

で、何かの手筈はその晩にすんだとみえて、翌日になると眼八、旅職人の風つきで、わざと間のぬけた顔をしながら、厄除橋の辺をウロついていた。

薄暮の海が眺められた。漁港らしい灯が日和佐川に映っている。宿の中を通過している街道には、ひとしきり荷駄の鈴や、宿引きの女の声や、さまざまな旅人の影が織っていた。

四国二十三番の札所薬王寺にゆく足だまりにもなるので、遍路の人のほの白い姿と、あわれにふる鈴の音もこのたそがれのわびしい点景。

「あ、こちら様だナ」

と、やつと見つかつたというふうには、眼八、とある角構えの格子先に腰をのばした。船玉祀りの御幣柱が、廂の裏に掛けわたしてあり、荒格子に三間土間、雑多な履物が上げ潮でよせられたほど脱いである。

櫂の板に「大勘」と書いて、表に打つてある標札をたしかめながら——実は海部代官所で所も内状も調べてきてはいるのだが——どこまでも不案内の渡り者らしく装つて、

「大勘……ウム、大勘、こちらの親方に違いない」

とつづやきながら荒格子をあけ、畏る畏る、

「ごめんなすツて」

と、上がりがまち框へ腰をかがめた。

部屋にいる手間取か内弟子か分らないが、いけぞんぎいな若いのが出てきて、

「なんだい」と見下ろした。

「旅たび人でございます。親方のお名前を承知しまして、お頼り申してまいりました」

「同職か」

「へエ」

「上あがンねエ」

「ありがとうございます」

「裏へ廻ると井戸がある。その側に小屋があるから、そこでゆつくり泊つてゆくがいい。

朝立つ時にやちよつと俺たちの部屋へ声をかけて行きな、わらし銭ひるめしと午飯ひるめしだけは饑せんべつ別べつしてやることになっているんだから」

「ご厄介になります」

格子を出て裏へ廻つた。

路次の横に窓があった。すだれ越しにチラと見ると、羅漢らかんのような裸ぞろいが、よから

ぬ弄戯あそびに耽ふけっている。

同職の渡り者といえ、宿なし犬に縁の下を貸すくらいな気安さで泊めてはくれるが、ちやんとあしらいの寸法がきまつていて、何ひとつ道具のない部屋で、塗ぬりの剥はげた箱はこ膳ぜんに、沢庵たくあん四きれ、汁一椀わん、野菜の煮しめが一皿ついて、あたりに人はなしといえども、それをあぐらで食うわけにはいかない。

禅僧のように、椀や皿の残り汁まで、きれいに湯で洗って飲んで、きちんと隅へ下げておく。一椀の恩に対する作法である。

そこへ中年の小僧が、

「客人、すんだかい」と膳をさげに来て、

「蒲団ふとんと行燈あんどんは、その板戸をあけると中にあるから勝手に出してくん。油があつたかしら、油壺を見てくんないか、客人」

「ございます、どうもご馳走様で」

「そうか、じゃお寝やすみ」

「もし、もし。ちよつとお待ちなすつて」

「何か用かね」

「親方にご挨拶をしたいと存じますから、ひとつお取次ぎを願います」

「親方はいないよ、この間うちから留守なんだ」

「じゃお内儀かみさんか誰か、お身内の方に、ちよつと会わせて貰えませんかでしょうか」

「お内儀さんは近所の衆と、遍路へんろに出て今は留守だし、ほかにや弟子か部屋の者ばかりだが、何か用かい、客人」

「ナニ、別段なことじゃございませぬけれど……じゃ、お前さんに伺つてみますが、誰か、こここの家に商売違いなお客が二人ほど、お世話になつちやありませんかね？」

「商売ちがいな？」

「若い男と女です」

「いねエなあ、そんな者は」

「いませんか……」と眼八が、ダメを押し額ひたいご越こしに相手を見つめた。ひよいと、その眼光りが変つたのを自分でも気がついて、

「へ、へ、へ、へ。まことに、妙なことをきくようですが、私の身寄りの者で、今は、大勘さんの家にお世話になつていふというような噂を、ちよつとよそで聞いたもんですからね……それで、何ですが……じゃ、そんな方はおりませんか？」

「いつ頃のことだい、それやあ」

「さようで……」

と、額に平掌ひらてをあてて、わざと考えるふうを装よそおいながら、にわかに、思いだしたように、鼻紙へ一分銀を一ツ包んだ。

「兄哥あにき、これやホンの少しだけけれど」

「いらねエや、お前は旅人めえ たびにんじゃないか。旅人からそんな物を貰うと、部屋の者に叱なられ
ら」

「なアに、誰がそんなことをしやべるもんですか、まア取つといておくんなさい、私だつてこうしてお世話になれば、旅籠賃はたごちんというものが助かっているんですから……。エーと
ころで、その若い男と女の客が、多分、こちらへ来たろうと思うのが、そうですネ、今から五十日前の前後か、それから後のことなんです、よく考えてみておくんなさい、きつと、お心当たりがあるでしょう」

「ああ、そうか……」

「知っているね！」

と眼八、一分銀を握らせたその腕くびをギユツとつかんで、

「それごらんせえ、やっぱり、お前さんが忘れていたんだ」

眼八の誘いにツリこまれて、大勘の内弟子は、うっかり、

「ア、そういえばネ、客人」

と、しゃべりだした。

「似た話があるぜ」

「ある？ ふム」

「もう一月あまりも前なんで、すっかり忘れていたけれど、ちようど、客人のいった頃に
あたるよ。小雨がソボソボ降っていた、暴風あがりからズツと降り通しで、部屋の者も仕
事がなしで、早く床についた晩なのさ」

へたな言葉をさし挟んで、相手のしゃべる図をはずすまいと、眼八、大事そうにソツと
ひとつうなずいた。

「……とネ、宵の五刻ごろ、トントンと表をたたく人があるんだ。おらあ親方の瘤みたい
な肩を揉ませられていたので、イイ機だと思ったから、親方、誰か表に客人でございます
ヨ、そういつて顔を覗くと、ふム、分っているとうなずいて、部屋の奴アみんな寝たか、

とこう聞くんでございます」

「なるほど」

「へエというと、親方は、いずれ今頃ウロついてくる客は、旅人だろから、あつちの小屋へ行燈あんどんを入れておけ、そして、後はおれが見てやるから、てめえは床に着くがイイ。そんな優しい親方でもないのに、妙だナと思ひながら、いわれた通り——今お前さんのいるこの部屋へ灯を入れていると、そこへ親方が、ふたりの客を外からここへ案内してきました」

「ふたり？」

「エエ、ふたりです。しかも、頭から酒菰さかごもをかぶつて、まるで乞食こじきのような風態をしているのに、親方はばかに親切に世話をしました。すると、てめえはあつちへ行つて寝ろといわれたので、そのまま、母屋おもやのほうへ戻りながら、井戸端で足を洗っているお菰こもを見ると、とても、白い足をしているんで、オヤ、とその時気がつきました。ひとりのほうは、ゾツとするようないい女、ひとりは五分月さかやき代の若い浪人者です」

しめた！ と眼八は、腹の中で雀躍こおどりしていた。

なお、さあらぬふうで、言葉巧みに聞き出してみると、その晩、ここへ泊つた素姓の知

れない男女は、翌朝、部屋の者が眼をさました時分には、もうどこかへ立ち去っていて、誰も知らないくらいであったという話。

「そうでしたか、それでおよその事情が分りました。イヤ、大きにありがとう」

眼八はていねいにこういつてから、自分の振分を解いて、

「うるさいことをきいてすみませんが、ついでに、もうひとつお伺いしたいと存じますが……」荷物の中から取り出した澁紙の端をほぐすと、コロコロと一本の鑿がころがりだした。

商売道具。

「平鑿だネ」

と、すぐに向うも目をつけた。

「エ、なかなかよく使いこんである鑿です」

「売るつもりなら部屋の者に見せてあげるぜ」

「なに、これは、手放すわけにはゆかない品なんで」

と、眼八、のみの平首に拇指を当てて、ピカリと、ひとつ引っくり返した。

「これや、私が徳島の城下はずれで、ファイと拾った物なんです。落し主は、こちらの半

纏とうりようをきている若い棟梁、うしろから声をかけましたが、ツイ見失って、そのまま、いつかついでがあつたらと、振分の中へまるめ込んでおきましたが、ここに……」と、鑿ののみを眼のそばへ寄せて——「源という字が片彫かたぼりしてあるが、こちらのお職人で、そういう頭字かしらじのつく人がおりましようかね」

「源？ ……じゃ源次のことかもしれない」

「じかにお渡しいたしたいと思いますが、ちよつと、耳へ入れて上げてくれませんか」

「いいとも、じゃア今ここへ連れてくるから」

と、大勘の中年者は、膳てのひらを掌てのひらへのせて母屋のほうへ戻つた。

眼八は拇指の腹であご髯ひげをコスリながら、畳へおいた平鑿ひらのみを見つめておつた。

何かのクサビになるだろうと、この間、研師とぎし大黒宗理の店さきで、そこにいた職人の道具箱からソツと一本かすめておいた品物だ。

「この鑿ののみを持っている源次という職人を取ツちめてみれば、大黒宗理のところから受け取つて行つた刀を、どこへ届けたか分つてくる。そいつさえ当たりがつけば、もうしめたものだが……」と、息を殺していると、

「ここか」と、外で職人らしい声がした。

「客人」

と、前の中年者が顔を出して、

「聞いてみたら、やっぱり鑿を失くしたのは部屋の源次という人だった」

「ア、それやどうも、お世話様で」

「先でも、使い馴れていた稼業道具を失くして、困っていたところなんで、話してやったら大よろこびさ。で、今ここへ連れてきたからね」

「そうですか」

と、片手について身をねじりながら、

「源次さんとおっしゃるのは？ ……」

と、土間の外を見ると、まぎれもなく、この間、宗理の店から、弦之丞とお綱の刀をうけ取って帰った、あの若い男である。

失くしたとばかり思っていた道具が手に戻って、大工の源次は、わけは知らずに礼をいった。

「近づきの印に、どこかで一杯やろうじゃねエか」

どつちから誘うでもなく、涼み半分、ぶらりと、連れ立って飲みに出かける。
 眼八には思う壺^{つぼ}。

「不案内でございますから」
 と、ついて行つた。

源次は礼におごるつもりなので、町の西端れの馴染^{なじ}みの家へ案内した。だが、その払いも眼八が先に越して、

「どうせ、今から部屋へ帰つても、この暑さじゃ寝つかれやしません。少し、どこかで涼んで行こうじゃありませんか」

と、厄除^{やくよけ}薬師の石段を上りかける。

「上へあがつてみなせエ、寒いようだから」

同職と思つて、源次はすっかり気をゆるめているらしい。だが腹の底はしまった男とみて、飲屋で話しあっている間に眼八がチョイチョイかまを試みたが、いつこう、口を^{すべ}らせてこなかつた。

で、かれは、少し業^{ごう}が煮えていた。

どこかで睨^{にら}みの利^きくところを見せて泥を吐かせてしまおう胸算。足場ばかり見廻してい

る。

山はいおうぎん医王山のゆうすい幽翠を背負つて、かんこどり閑古鳥でも啼なきそうにさびていた。

やくどし厄年の男女がふめば厄難をはらうという、四十二段、三十三段の石段を上ると、日和佐川のはけ口から、こ弧をえがいている磯の白浪、ひと目のうちだ。

明鏡のような夏の月が、荒海から天へ洗い上げられている。

うろこ雲の徐々とした歩みに、月光が変るにつれ、海もたえず明暗の変化を見せていた。その、冴えきつた一瞬には、すいてんほうふつ水天髻鬚の境、き紀の路じの山が、ありやなしやに見えてくる。

「エエ、気味のいい風だ」

と汗をひそめて、眼八は境内の捨石へ腰をすえ、

「なるほど、ここはいい所だ」といった。

眺めのいい所という意味と、源次をひっぱたくにはいいおしらす白洲だという二様の意味にとれる。

「夏知らずというところさ、あつしやあ、きのう昨日もここでウツトリとしてしまった」

「昨日？」

と、眼八は、すぐに揚あげ足をとって、

「きのうは浜へ仕事に行つたと言いなすつたが」

「なに、ちよつとこの辺へ使いがあつてね」

「一昨日はたしか徳島にいなすつた」

「エエ、親方の代りに、新造船しんぞうの絵図をとりに行つて、歸りに、御城下を少しブラついて

きた」と、源次もそこで鑿のみをなくしたという事実があるので、これだけは隠されなかつた。

よウし！ この辺からソロソロ締木しめぎを責めてやろうか。

眼八はそう思いながら、

「源さん、まア掛けねえな」と、煙管きせるの先で、杉の木の根あがりを指した。

「御輿みこしをすえると、眠くなるからなあ」

「眠くならねエようにしてやるから、とにかく、そこへ落ちつきねえ」

「いやだぜ、悪い喉のどなんかを聞かせちや」

「いいやな、お前めえ、ここは四国二十三番の札所ふだしよだ、御詠歌ごえいぐらいはおつとめしなくつち

や、靈地へ対して申しわけがない。そこでぼつぼつ始めるが……オイ、源次ツ」

と、肩を突ツ張つて、にわかに鋭くなつた。

「なんだ、旅人」

と源次はあツ気にとられた顔をした。

「お前は何か、先刻おれが返してやった平鑿を、徳島のどこでなくしたか気がついてい
るか？」

「冗談いうない、落した所を知っているくらいなら、何も、わざわざ他人に拾われやしね
え」

「そうだろう。じゃ教えてやるが、実は、あれや御城下の刀研ぎ、大黒宗理の店先で、
お前が頼み刀をうけ取っている間に、道具箱からぬけだしていたんだ。なにも、平鑿に足
が生えたわけじゃねえから、無論、おれの指先が、黙ってお預かりと出かけたんだが……」
源次は静かに顔色をかえていた。

その時、宗理の店で、背中合せに掛けていた男の姿を思い浮かべて、かれは、しまった
！ と臍をかんでいるらしかった。

眼八は相手の眸を読みながら、

「オイオイ、駄目だ駄目だ、逃げようたつて逃がしやあしねえ。徳島奉行の御配下で、釘
抜きの眼八といわれている鬼手先だ。その釘抜きが噛みついてしまった以上は、めった

にここをズラからすものか」

「野郎！」

と、源次は片足ひいて、

「じやてめえは、旅人といつていたが、徳島から潜りこんできやがった岡ツ引だな！」

「神妙にしろッ」

「やかましいやいッ」

手拭にくるんでいた平鑿が、風を切つて眼八の脳天に跳びかかってきた。

「ふぎけやがって！」と、眼八は身をねじつて、鑿の腕くびを引つつかみ、デンと投げ業わざをかけたが利かず、腰をくだいて、ふたつの体、よじれながら横ざまにぶつ倒れた。

「ちイッ……この野郎」

「御用だ……御ッ……御用」

と、組んず、ほぐれつ。

龍姿りゆうしの松をすく月の斑ふに、ここを必死に、キラめき合う鑿と十手。

月光もくとの下に、黒いふたつの体、ややしばらくというもの、転々と、上になり下になって

よじれ合っている。

と。

下に組み伏せられたと見えた眼八、足業あしわざにかけて、相手の胸を万力まんりきのように締めつけ、源次が、

「うッ」

と、気を遠くしたのを見すまして、

「骨を折らしゃアがった」

と、起きかえって、側を離れてくると、その手と源次の間、いつのまにかタランと、捕縄とりなわがつながれている。

源次はもう抵抗しなかった。肘ひじで、やっと体を起こしながら、縛られている自分の手へ眼を落したままうつむいている。

「ばかな奴だ」

と、月に光っている足もとの鑿のみを遠くの方へ蹴とばして、眼八、捕縄の端を三尺ばかり垂らして持った。

「名うてな釘抜きだといひ聞かせているのに、ムダなあがきをしゃがって、ふぎけた野郎

だ。さッ、お白洲しろすだぞ、世話をやかせず、泥を吐かねえと、捕縄の端の鉛なまりだま玉が横ッ面へ飛んで行くからそう思えッ」

と、凄味を加えた言葉つきで、右腕の袖をつまみあげた。

「——おとし昨日の晩、てめえが大黒宗理の所から持つて帰った刀、一本は無銘の長い刀、一本は新藤しんとう五国くにみつ光だ。宗理の店の研物台帳から、ちゃんと洗いあげてあるんだから、いい遁のがれはかなわねえ。あの双腰ふたこしを、てめえいつたいどこへ届けてやったのか、まず、それからひとつ訊きこうじゃねえか」

「……おれに訊いたつて無駄だからよしてくれ、源次は口が固いと見込まれて、親方から固く頼まれてしたこと、代官所へシヨツ曳かれたつて、算盤そろばんゴザへ坐らせられたつて、決して口を開あきやしねエから」

「ふん……面白い」

と、あざ笑つて、

「てめえがそういう男なら、眼八の釘抜き根性も、いつそう脂あぶらがのつてくるといふもんだ。腕によりをかけても、その口を開かしてやるから見ていろいろいッ。おうッ、吐ぬかさねえか」

ブランと提さげていた縄の端で、荷馬にうまの尻をなぐるように、いきなり二ツ三ツ源次の頬を

見舞った。

「さッ、申し上げちまえッ。あの双腰を誰に届けてやった！ いや、その届け主は読めて
いる、場所をいえ、隠れ場所を！」

「そんなことまでおれは知らねえ」

「ナニ、知らねえ！」

「知らねえ！ おらあ、そんな深いことまで知つちやいねえ」

「甘く見るなッ」とまたひとつ、鉛玉をビュツとうならせて、源次の顔に血を吹かせた。

「ア痛ッ……」

「いてえか！」

「し、知らねえものを」

「野郎」

と、土足でその背中を踏みつけて、

「知らねえというなア申し上げますという枕言葉だ。そんな白しろをいくら切つても、手加減
をするような眼八じやあねえ！ 吐ぬかせ、いえ、ひとことというのが遅れるたびに、ひとつ
ずつてめえの面つらにアザが殖ふえるぞ」

ばらばらと冷たいものが降りかかった。

沖の辰巳島たつみじまから、まともに吹きあげてくる海風に、身ぶるいをした巨松こずえの梢こずえが、振るい落した白玉はくぎよくの雫しずく——。

眉に光るやつを、手の甲で拭きながら、

「——今から一月半ばかり前に、法月弦之丞とお綱という奴が、酒菰さかこもに身をつつんで、小雨のふる闇にまぎれて、大勘の家へ来たという凶星まで、スツカリお調べが上がっているのだ。いくらてめえが親方に義理だてをしたところが、やがてすぐに判ることじゃあねえか、つまらぬ強情を突つ張つていねえで、潮しほびたしをなおしにやったあの刀を、どこへ届けた。その匿かくれ家を白状がしてしまえ。すなおに泥を吐いてしまえば、眼八のとりなしで、お上かみのお咎とがめはいいようにしてやるぜ。どうだ源次、オイ源次、よく胸に手をあてて考えなおせよ」

「徳島へ出かけたついでに、刀を受け取つてきたのはたしかだが、それを途中で棟梁とうりやうの手へ渡したきり、後のことは何にも知らねえ」

「しぶてえ奴だ、じゃ、どうあつても実じつを吐かねえな、よし」

と、捕縄に輪を描かせて、グルグルと源次の喉のどへからませたやつを、グンと引つ張つて、

「知りませんという音を止めねえうちは、しばらく、こうしてやるから、根くらべをするがいい」

「ウム……」と、源次は繩の輪に喉笛をしめられて、苦しそうな眼を吊りあげた。

「どうだな、塩加減は？」

と、眼八、時々ジリジリと締めて、

「まだ甘えか、これでもか！」

「くツ……く、くるしい」

「そりやア苦しいにきまつていらあ、まだまだ釘抜きの眼八が本気になって責めにかかるよ、こんなどころじゃございませんよ」

と、憎々しい面がまえを寄せて、源次の苦しみを冷然と眺めていると、突然、かれの後ろのほう——。

そこから木立を隔てて見えるのは、月光の底に沈んでいる二十八柱の大伽藍、僧行基のひらくという医王山薬師如来の広前あたり、嫋々としたもの淋しい遍路の鈴が寂寞をゆすつて鳴る……。

その鈴は、この境内では常に聞くところの、珍しくない音であつたが、伽藍の森巖にひえびえとした夜気を流して、なんとなく、釘抜きの眼八の鬼の心をも寒くさせた。

で、場所が悪いと気がさしてきたものか、

「立て！」

といつて、源次の首の輪繩わなわをはずし、その繩尻をシヨツ曳びいて、

「せつかくここで、おつ放してやろうと思つていたが、そう情を突つぱるならぜヒがねえ、代官所の砂利を咬かませて、ゆつくり、荒療治で聞くとしよう。ばかな奴だ、ここで白状してしまえば、眼八の胸ひとつ、お咎とがめなしに見のがしてやるものを、向うへ行きやあお公お然びらになる、泣いてもわめいても間に合わねえぞ」

「……………」

「棟梁の大勘が、どれほど口止めしたかは知らねえが、こんなことで臭い飯をくうなんて、氣の利きかねえ話があるものか。御牢舎ぐらいですみやいいが、隠密かくまを匿かくいだてした連累れんるいとなると、とても、そんなことじやすむまいぜ……エエ源次」

「……………」

「船大工の部屋にゴロついているお前めえにしろ、どこかの在所にや、肉親もいるだろうに、

助任川の曝し場へてめえの首が乗つてみる、親兄弟にまで、泣きを見せなくちやなるまい。アア、口が酸ツぱくなつた、俺にもこれ以上の親切気は持ちきれねえ、さ、立ちなよ、そろそろ行く所へ行くでしょう」

「……ま、待つて下さい」

「腰が立たねえのか」

「いつてしまいます、隠していたなあ、あつしが悪うございました」

「白状するつていいのか」

「ハイ……」と源次はしおれ返つて、唇の血を吸うように噛みしめた。

「じゃ、弦之丞とお綱の奴は、いつたい、どこに匿かくまわれているのだ」

「それだけは、まったく源次も知らないことなんです……ただ、あつしの知つてるだけを白状します」

「嘘はあるめえな」

「へエ、嘘まことと真まことを七分三分にまぜたところで、なんの役にも立ちやしません。ほかのことは、洗いざらい申し上げます」

「ウム」

「あつしは、あの侍と若い女が、法月というのかお綱という女か、国者かどの者か、皆^か目^{いもく}、そんなことだつて知りやしません。ただ棟梁の大勘が、お家様の義理合いでやむなく一時の匿^{かく}れ家を、どこかへ探してやったことから、細かい用事をあつしにいいつけたんでございます」

「そのお家様というのは」

「徳島の御城下と大阪表に出店のある、四国屋のお久良^{くら}様、たしか、そういつたと思います」

「ふうム」

「どうやら筋がほぐれてきた。」

眼八は、釘抜きのように固く結んでいた口もとから、大きな前歯をニツとむいて、

「その四国屋のお久良に、大勘のやつは、どういう義理合いをうけているんだ」

「あすこの持船以外の仕事は、雑魚^{ざご}舟ひとつつくるわなというほどな大顧客^{おおとく}でございます」

「ウ、なるほど」

「ことに、お家様には可愛がられている大勘なので、こんどのことも、嫌とはいえずに頼

まれたことだろうと思います」

「そういう仲じや無理はねえ、そして、お久良は今大阪にいるはずだが、どうしてそんな打合せができたのか」

「ちようど、先々月の月つき半なかばでした」

「ウム」

と、胸で日数を繰っている。

「お久良様からきた飛脚をうけて、棟梁が何か心配そうに考えていました。と、それから三、四日——そうだ十九日の晩」

「えっ、十九日の晩？」

と、思わず、おうむ返しに眼八の返辞が出たのは、胸で繰っていた日数から推して、それが、ぴつたりと四国屋の商あきな船いぶねが、大阪表から阿波へさして出た日に符合ふごうしていたので。

「ウム……それから」と、笑壺えつぼにいつて一心に聞く。

「その十九日の朝、棟梁が突然、小松島こまつしまに長崎型の船が入っているから、仕事のために見ておこうといって出かけました。わっしも、自分から頼んでついてゆくと、向うへ着い

たのはもう夕方、浜へ行ったが、そんな船は見当たらねえんです。で——妙だなと思つたから、棟梁、どこなんで？ と聞くと、沖だよ、だが源、てめえ今日のことは、親兄弟にも洩らしちゃいけねえぞ、そういつて、固く口止めされたんで……」

と、その口止めを破っている自身に気がついて源次は、ちよつと、うなだれた。

「それから？」

と眼八は、相手に顧慮のいとまを与えないで、問いつめた。

「じゃあ船図面を取りに来たわけじゃないんですか、ときくと、棟梁は、ウム、と少し怖い顔をして、小松島の磯をブラブラあるいていましたが、そのうちに、どこからか、船頭三人、ギーと棟梁の前へ漕いできて、どっちも黙だまりで乗りました」

「それが、十九日の夕方だな」

「そうです。宵はよかつたが夜半よなかです、イヤな雲になつてきました」

と源次は、その晩のことを思い浮かべるらしく、海の方へ眼をやつた。

宵に飲んだ酒の気もどこへやら、更ふけるほど冴さえてきた月明りに病人のような顔色だ。

「——船が島の蔭へよつたので、ここは？ と訊きいてみると淡路のそばの沼島ぬしまだつていう

ンで、わつしもあつけにとられました。——とそのうちに風がだんだん強くなる、浪は荒れる、大雨はやってくる。で、みんなへトへトに疲れた頃、真つ黒な沖合に、ポチと、赤い灯が一ツ、浪にもまれて見えませんでした」

「……オオ、……ウム……」

「あれだ！　という棟梁が、三人の船頭に、十両ずつの酒代を投げだして、腕ツ限り漕がせました。何がなんだか分りやあしません、途方もねえ大暴風雨です。だが、ヒヨイと目を開いた時には、向うの船の赤い灯が、前よりよッぽど大きく見えて、なんだか、わーッという声が聞こえやした。近寄ったナ、と思う途端に、その灯も消えれば向うの船も、グルグル廻っているようでした。なおワツワツという人間の声です。まもなく白々と夜が明けて、少し凪いだ時には、こつちの船は、昨日の小松島を素通りにして、日和佐手前の由岐の浜へ、ギツギツと帰っていたんです。……ハイ、これだけいえば、もうお分りでございますよう、その船の中へ、何をすくい込んで来たか、これ以上、棟梁のしたことはツきりいうのは、なんぼなんでも、舌がしびれていえません。どうか、お察しなすつて下さいまし」

いかにも眼八には、これ以上の贅言をきく必要がない。

あの理智の澄んだ四国屋のお久良が、大阪表からつづらを首尾よく乗せただけで、阿波に到達した時の、より以上きびしい岡崎の船ふなせき関や、撫養むやの木戸の嚴重を、案じていない筈はない。

で、沼島の沖あたりで、こう、かく、というような謀しめしあわせは、とくから謀しめしあわせられてあったのだ。

してみると。

当夜——ふなべりを傾けて阿波方の納戸なんどぶね船がぶつかってきた刹那、四国屋の船のみよしから、お綱をひつかかえて激浪へ身を躍らせた弦之丞の行動は、あえて、殺到した追手におどろいて、進退きわまつたのではなく、あのことはなくとも、当然、なすべきことを勇敢にやってのけたままであった。

そして、あの晩の暴風しけと、弦之丞の運命が窮極にまで行ったと見えたことが、それから後、二月ふたつきあまりの経過とともに、すっかり阿波の要心をゆるませ、かなり目ばしこい三位卿にしてからが、一度は、弦之丞の最期を漠然ぼくぜんと信じたものだ。

眼八は、息を内へひいて源次の自白を聞いていた。

かれも、大阪以来の顛末てんまつは承知していたが、こんな裏面があるとは、想像もつかな

いこと、潮びたしの刀から足をつけてここに到ったのは、自分ながら、あやまちの功名という気持がする。

「そうか！ ……」

と太い息と一緒に、聞き終つて、

「その晩傭やとわれた船頭、誰と誰だか、覚えていいるだろうな」

「存じません。へい」

「徳島訛なまりか、それとも日和佐の船頭か」

「この辺の者ではなく、おそらく、拔荷屋渡世ぬきやとせの仲間だろうと思うんで」

「拔荷屋か？ ……」と眼八も少しウンザリした顔だ。

弦之丞の召捕をすました後で、大勘をはじめそいつらも、芋いもづるにあげてしまおう下心で聞いたのが、海鳥のように、巢を定めぬ拔荷屋では、いくら釘抜きでも手がつけられない。
ない。

長崎沖渡しで、蛮船ばんせんから禁制の火薬や兵器を買いこむため、一時、蜂須賀家を利用した拔荷屋のともがらが、いまだに近海の野々島ののしま、出羽島、弁天島あたりに巢を食っていて、手のつけられない海辺かいへん漂泊者ひょうはくしゃとなっている。

山の山窩さんか、海の抜荷屋ぬきや、どっちもどっちのしろものだ。

「じゃ、まあ、それはいいとして……」と、匙さじを投げて「由岐ゆきの浜はまへあがってからどうしていた？」

「あつしはすぐに、潮水しおびた浸しになったお兩人ふたりの刀を、大黒宗理の所へ頼んでくれと渡されて、棟梁と別れました」

「そこは？」

「八幡様の森でした」

「弦之丞と口をきいたか」

「あつしがいる間うちは、棟梁もその人も、黙りあっております。もつとも、女のほうが、だいぶ水を呑んでいたのです、その手当てにも追われていたんで」

で——眼八の腹の中の口書は、さつき、中年の小僧がしゃべった話とびったり継目つぎめが合ってきた。

「そうか、それですつかり事情が分った。まあ、今のところじゃこの辺でよかろう、オイ源次、立ってくれ」

「へい、ありがとうございます」

「なにがありがてえんだ」

「知ってる限りのことは白状しました。約束どおり、放しておくんなさるんでしよう」

「けッ、虫のいいことをいうなッ」

と、いきなり縄尻をしぼった眼八、

「さ、代官所へ歩け！」

と、源次の腰を蹴つて、石段の方へ引きずつてきた。

欺しだまに乗つたと知って、源次は、地だんだをふんだ。

いまさら、大勘の信を裏切つたことをすまなく思う。親方の秘密を売って助かろうと思つた根性が、われながら情けない。

だが、もう追いつかない。ただ、歯ぎしりを噛むばかりであった。

釘抜きの眼八に、弱腰を蹴とばされて、勢いよく突ンのめりながら、何かわめいた。

眼八は、セセラ笑いをして、

「さ、出かけた、出かけた！」

と、もう一つ、足をあげて弾はずみをくれる。

よろけた途端に、捕縄が張つて、また仰むけにひっくりかえつた。
もう自棄やけだという風に、

「畜生ッ」

と、かぶりついてくるのを、

「亡もうじや者めツ」

と、用捨ようしやのない捕縄の端で、牛を懲こらすようにひツぱたく。

そして、半死半生にさせながら、女坂をゴロゴロと蹴転くまがして行つた。
すると。

雪のような月影をふんでまだら石段の下から息をせいてくる三、四人——それと白い月
明りと闇のまじつた杉木立の間を、バラバラと駈け寄つてくる提ちようちん灯あかりが見えた。

眼八は、

「あつ？」と、むねを衝うつたが、その明りの一つに、海部かいふ代官だいかん所しよという朱文字を認めて
ホツとした。

——というよりはこの場合、助かつたという気持で、死物ぐるいの厄介者を、何よりは
その手へと、

「おう、御支配所の衆！」

声をかけると、熱い息がハツハツと聞こえるほど、すぐ側まで駆けってきて、

「や、眼八か」

と、意外らしく、かれを囲んだ。

桐井角兵衛きりいかくべえのさしらずで、少し遅れて出張でばつてきた徳島の町同心まちどうしん、浅間丈太郎あさまじょうたろう、田宮

善助すけどうしん、助同心岡村勘解由かげゆ。

提灯しるしを持つているほうは、海部同心の安井民右衛門たみえもんと土岐鉄馬とぎのふたり。

「どうしてここにおったか」

と、一同、不審な顔つきである。

実をいうと眼八は、大勘の家へ旅人として静かに泊り込んだまま、夜半よなかに、外へ迫る捕とりて手へ案内をする約束であった。

それが、無益むだだともぬけたし、源次という者に執着しやくちやくをもったので、急に独断で方針をかえた。そして、これからその源次を代官所へ曳ひいて、断ことわりに行こうと思つていた出鼻でばなだったので、向うも、合点がゆかない様子である。

手短かに、源次から調べ上げた事実を話すと、五人の同心、少し出しぬかれて鼻白はなしろん

だ様子に見えた。

眼八は傲慢ごうまんに胸を張って、

「じゃ、こいつを渡しておくから、弦之丞を召捕あるまで、海部の揚屋あがりやへ預かっておいて貰おうか」といった。

海部側の同心は、言下げんかに、

「それは困る」と拒こぼんだ。

なぜ？ と眼八がほじくると理由は簡かんにして明、——今、町の辻々に伏せておいた密偵のひとり、この間から行方の知れなかつた大勘がこっそりと帰ってきて、何用か、この薬王寺の道へ廻しつたという報らせ。

すわとばかり、代官所の騒さわぎである。

折から、助勢にきて打合せ中の徳島同心、浅間、岡村、田宮の三名も加わって、捕手はうしろ巻きとして山下に伏せ、五人は先廻りをしてここへ登ってきたところ。

「今、源次をここで預かるのは困る」と、にべなくいったのも、ムリではない。寸刻を争っているのだ。

だが、眼八は我がを曲げない。

ここは、海部代官の支配区域、本来、お手前たちの腕だけで、こんな者は、とうにパキパキと召捕^あてみせなければならぬのではないか。それを、徳島から釘抜きの眼八様^{すけ}が助に来てやつているんだ。おまけに、縄までかけて渡してやるんだ。もったいねえ御託^{ごた}をいうな——という鼻息。

慢心もあるし、郡奉行^{こおりぶぎょう}の配下というと低く見る癖がついている。で自然と、手先のくせに同心を顎^{あご}あつかいな物言いぶし、海部側も納まらない、ガヤガヤしばらくもめていた。

ところへ、捕手のひとりが飛んできた。

大勘の姿が、参詣道^{さんけい}に見えたという。もうグズグズしてはいられなかった。

「おい、捕方」

と、仲を取って、助同心^{すけどうしん}の岡村勘解由^{かげゆ}が、

「お前が暫時これを預かっておけ」

と、半死半生の縄つきを渡した。

渡された捕手は、源次を抱きこんで、女坂を駈け上がり、さつき、眼八が腰をすえたあたりの巨木へ、縄尻を巻いて、番に立った。

海部側も徳島側も、もうケチな仲間割れをいいあっているひまはない。

無言で、広い境内の物かげへ、思い思いに姿を散らかす……。

腕でこい！ と眼八は、ふたたび前の木蔭へ返って、伽藍がらんの正面につづく白い敷石を睨みながら、腹巻を固く締めた。

——その口には十手。

もう、人気ひとけは滅している。

時折、伽藍の近くから、夜籠よこもりの遍路へんろの鈴りんが、ゆるく、眠たげに……。

シーンとしてしまった。

月の位置もだいぶ変って、細こまやかな針葉樹の影は、大地へ蚊帳かやの目のようにゆれている。

石段の口から、一ツの影が上ってきた。

月に白い菅笠すががさに、顔は暗く隠されているが、肩幅のひろい巨男おおおとこ、裾すそをとって、脚き絆やはんわらじ、道中差を落している。

ジツと、境内を見廻していたが、やがて、大股に本堂へ向ってきた。と、思うと、またふと足を止めて、参差しんしとした杉木立の奥をすかすように見た。

鈴が鳴っている。

かすかだが、耳にふれた。夜籠りの詠歌の鈴の音。

それを便りに、木立の蔭へまぎれ込もうとすると、いきなり、

「大勘ッ」

と、おどりかかっ行って行った釘抜き眼八が十手で、力まかせに肘を撲りつけてから、

「御用だッ」

と烈声をあげた。

「あッ」と、よろめきながら大勘。

「しまった！」

という様子で、脱兎のように後へ駆け戻ったが、もう、むらがる人数が足もとを待ちか

まえて、

「御用ッ」と、飛繩の風！

「御用だ！」と十手の雨。

月光を衝いてわめきかかってきた。

わらわらと八方を塞いで、入れ代り立ち代り、からんでは離れ、組んでは解かれる。

「退いた」

と眼八、海部側の者に見よがしとばかり、群れをわけて正面から飛びかかる。

大勘は道中差を抜いて、かれの真つ向を待ちかまえた。だが、眼八の十手が、風を切つて入ると同時に、飛んできた捕縄が、拝み打ちに下ろしたかれの手元をさらって、ガラリと刃物を巻き落してしまった。

黒い人間の声が、山になって、ひとりの上へ揉みあつた。

「ご苦労だった」

と、徳島の同心浅間丈太郎と田宮善助が、火事を消したように一同をねぎらつた。

海部側の安井、土岐の二同心も、自分たちが、手を下すにいたらなかつたことを同慶しあつて、

「眼八、さすがに、鮮やかだな」

と、ほめた。

「オイ、そつちの奴も曳き出してこい」

助同心の岡村勘解由が、口へ手をかぎして向うへどなると、

「おつ」と、さっきのひとりが預けられた縄付きの源次を曳いてくる。

「引きあげましようか」

と同心連中、涼しい顔で、月明りの顔を見あつた。そして、源次と大勘、ふたりの縄付きを引つ立てて、意気揚々と、前の裏道——女坂のほうへ向つて行く。

わざと、正面の参詣道を避けたのは、医王山薬師如来の霊地を意識するおそれであつた。かれらも、不浄役人ふじようやくにんということを、気づかずに自認している。

「暗いな」

「こう廻るのが近道なのだ」

そういったほど、喬木きようぼくの厚ぼつたい茂りが、一同の上をふさいできた。みんなわらじばきなので、シト、シト、シト……と揃う蹠音あしおとが言葉のない間を静かにつなぐ。

ドウツと、滝の落ちるような音の奥から、寒いような嵐気らんきが樹々の眠りをさましてくる。大勘は時折、ものいいたげに源次のほうを見た。源次もうなだれて棟梁の影を眺めた。だが、無論、一言声ひとこゑをかけることもできない。

と——真つ暗な、女坂の降り口くだにかかろうとした時、すぐそのあたりの物蔭から、鈴りんを振り鳴らして、一同の前へ歩みだしてきた者があつた。

白衣びやくえをまとつた遍路へんろである。

紺こんべりの道者どうしや笠をかぶり、白木の杖と一個の鈴りんを手にしていた。そして、黙然もくねんと、そこに突つ立つた白い姿に、緋かすりのような木の影が落ちてゐる。

「退どけつ」

と、ひとりの捕手がどなった。

うつむき加減に、杖をついた道者笠は、月に咲いた毒茸どくだけのごとく、ジイと根を生はやしたまま、退どこうともせず、驚いた様子も見せない。

道者笠の遍路、いやに、おつとりとした物構えで、意気揚々と引き揚げてきた捕手の前に、鷲さぎとも見える白木綿しろもめんの姿を立たせ、肩杖について、黙然もくねんと、いつまでも狭い山篋せきの小道をふさいだまま、どなられても、動く様子がないので、先に立ってきた捕手の四、五人、少し、小気味がわるくなってきた顔色。

「オイ、同役」

と、後からボツボツ歩いてくる仲間を待ちあわして、

「変なやつがいる」

と、肩だけは突ツ張つたが、やや息を殺したかたちである。

「なんだ、へんろにん 遍路人ではないか」

「そうらしい」

「さつきから間の抜けた鈴りんを振って、しきりと医王山の境内をウロついていた奴だろう。それがどうしたんだ？」

「あの通り、道はばを阻めて、テコでも動く気色がない」

「ふて太エ奴だ」

と、帯の十手を抜いて、それを手にピカピカさせた一人、ずかと前へ踏み出して、

「やいッ、いたけ 遍路！」

と、肩をもたせている白木の杖を、ゴツンと十手でぶちながら――

「なんだって、こんな狭い道に棒を呑んで突ツ立っているんだ。退どけ退どけッ、海部代官所の者と徳島同心の方が、縄付をつれて通るところだ。動かねえと蹴飛ばすぞ！」

遍路の笠へ顔をよせて、威いたけ猛だかにどなりつけたが、かれは、依然として、ヌツクと立ったまま、肩杖をついたまま、そして、紺べりの笠をうつ向けたまま、返辞もせねば、微動もせぬ。

「ははア！ とそこで顔を見あわせたことである。こいつア片輪だ。ツンボか唾おしか、気の

変な脳病もちかに違いない。常人なみにあしらって、埒らちのあかないのはこっちの落ち度。

だが、不具者の遍路、お上かみの者といつて手荒くもなるまい、どこかそこの横へソツと抱いて片づけてしまえ！ と目くぼせで五、六人ゾロゾロと前へ出ると、その手も触ふれさせず、杖一步、かえって向うから一ひとまた跨ぎして、

「あいや」

と、少し笠を揺るがせる。

「この野郎、唾ではない」

かツと、怒つていうのを冷ひややかに、

「無論——」

と、声を含んで、

「唾ではござらん！」

さらに一步、あきれ顔の捕手の前へ出て、それには目をくれず、紺べりをつかんで相手の肩越しに、後の人数の影を見る。

とは知らずに、得意な眼八と五人の同心組、なお十四、五人の捕手に縄付の前後をまもらせて、何かガヤガヤと話しあいながら、杉と杉との間をうねって押してきたが、道が狭

いので三人と肩を並べては歩けず、そのまに先がつかえてしまった。

「オイ、どうしたんだ？」と、うしろのほうであせっているのは眼八の声。

その返辞もこずに前の者が、逆に、タジタジと後退あとすきってきたので、のび上がってみると、ひとりの遍路を相手に何か言い争っているふうなので、眼八は縄付のそばを離れて、すばやくそこへ潜くぐって行った。

と見て、海部同心の安井、土岐、助同心の岡村勘解由かかげゆ、眼八について列の前へかき分けて出る。

遍路は、磐石ばんじやくのように佇立ちよりつしたまま、しきりと猛たける捕手などには、言葉もくれず、耳も藉かさない。そうして、同心組の者が来るのを待ち設けていたように思われる。

「てめえは夜籠りの遍路だろう、何をグズグズいつているんだ、ついでに海部の百姓牢へも参籠さんろうして行きたいというのか」

と、眼八は無造作に見て、その襟えりがみをつまみそうに、片腕の袖をまくりあげたが、キラツと笠の蔭から射向いむけられた眼光りに、そう簡単に手がのびなかつた。

「お前たちに用はない、上役がおるであろう、同心の者をこれへ出せ」

「な、なにツ？」

「話がある！ 同心衆」

呼ぶように腰を伸ばした。

「何者だツ、貴様は」

海部の安井民右衛門、胸を張って威喝いかつした。

浅間丈太郎、田宮善助、徳島側の者も何事かと騒いで、捕手を排はいして進んできた。そうして、口々にまた咎とがめた。

「何者だツ、汝なんじはツ」

「何用あつてそこに立つのか」

「名乗れ！」

「姓名を申せ」

各一句ずつわめいたところで、遍路は、さらに悪びれない語韻ごいんで――。

「拙者は」

と、もの静かに名のりかけ、

「おのおのの尋ねている、法月弦之丞でござるが……」

と、澄みきつた態さまで、向うの動どうじ方を眺め廻した。

ぎよツとして足もとを浮かしかけたが、同心も捕手の者もひるがえって、自分たちの耳を疑っているように。

——拙者は法月弦之丞であるが。

こういったと思う相手の、こともなげな今の声を反復して、見つめあった。

そうして、彼とこれとの間に、氷のような無言が張りつまった。徳島の城下はいうまでもなく、八郡の代官手代が、血眼になつて検索している人間が、捕手や同心の集まっている直面へきて、こう冷然と、みずから名乗つて立つばかがあるうか。

と、一度は思ったが……。

彼の自若^{じじやく}として不敵な態^{さま}。わずかにうかがわれる面^{おも}ざし、背恰好^{かつこう}、まぎれもあらず、人相書のそれとピッタリ。

「ア——」

ややしばらくしてから度胆^{どじごも}を抜かれた空^{から}声^{こえ}を筒拔^{つつぬ}かせたが、助同心の岡村、突然、
「それツ、取り囲め！」

と、ののしって、身^みみずから十手を揮^ふつて当ろうとするのを、

「待てッ」と、弦之丞の一喝が、その出足をくじいて、

「妄動するな、うかつに動くとは危ないぞ、動かぬ切れ刀へさわってきて、われから命を落すまい。無益な殺傷沙汰はしたくないと思う、で、話がある！ 静かにせい」

と、自分の配下でも鎮めるように威圧した。

十手を把る者が、これだけのことを、相手に悠々といわせただけでも恥辱の限りだ。多少の犠牲者を出すまでも、一気に、召捕つてしまえ！ そうはじりじり思ってみるが、どうにもならない相手だった、どこから飛びつく隙もない、いや、既にそういう衝動を作る大きな意気というものを失っていた。

弦之丞は知っている。

すでに、捕手の頭は冷智になつて自分を見ている。何か一瞬の狂人にさせるキツかけがなければ、かれらは決して、朱をあびる域へまで、捨身にかかつてこられない。

「弦之丞！」

やむなく浅間丈太郎がいった。

「——遁れぬところと覺つて自首して出たか」

「そうならば定めしご都合もよからうが……」

口辺に冷蔑れいべつを漂わせて、

「少しご無心を申すのじや」

「無心ツ？」

「今、この境内で召捕られた、ふたりの縄付を、拙者の手へ渡してもらいたい」

こんな言葉へ、もしまじめな応答をするならば上役人の資格はない。——弦之丞はそう
いった口ですぐにまた、

「お渡しはあるまいな、それが世上へ聞こえては貴公たちの扶持ふちばなれじや。しかし、拙
者一身のため、縛ばくをうけた大勘と源次を見捨ててもおかれぬ。どうしてもこのほうへ申しう
けるぞ」

「だ、だまれツ」

「アイや」

「文句をいわさずに、弦之丞を召捕つてしまえ」

「騒ぐなツ、ここは医王山の靈域、汝ら、不浄な血と死骸を積んで、寺社奉行への申しわ
け何とするか。それはともあれ、仏地への畏れおそ、また第一足場が悪い。まず騒がずにおい
でなさい。山を下るまでご同道申しあげよう」

先に立つて歩きだした。

まさか、逃げるとは考えられない。自分から捕手の前へ立った彼――。

五歩――六歩――誰も足を出す者がなかつた。

「傍若無人なやつだ、よしッ、俺が」

と、釘抜きの齒がみをさせた眼八。

目をつぶつてゆく気もちで、一跳足ちようそくに、かれの体へ貼りついた。と、弦之丞、身を

ひねつて、

「これッ」

と、眼八の小肥りな体を、左の腕の中へ締め込んで、グツと抱きあげ、後の十手へ白木の杖を一揮りふするや、急に、眼八をかかえたまま、女坂を闇の底へ、ドドドドツと駈けだして行つた。

途端。

きようち

怯智きようちな居すくみをどやされた捕手や同心たち、あツと眼色をかえ、初めて、瞬間的な狂人になり得て一散に、麓ふもとへ小さくなる白いものを追いかけた。

やがて、薬王寺の山の裾すそで、ワーツと、乱闘の叫びが起こる。

目前まいてにいた対手を逸して、今さら仰天した捕手のわめきであろう。逃がしては大事と、駆け廻まわっている同心たちの叱咤しったであろう。

ところが、皆の疾走したあとに、三、四人ほど駆けおくれしていた。

召捕った二人の縄尻をつかまえていた者で、これは空身からみでないから、走るに走り得ないで、縄付を突きとばすように、後からあわてて気を急ぐ。

いちど走りだした同心の土岐鉄馬は、ふと思ひあたって、

「アツ、もしや?」

と、途中から踵くびすをめぐらし、大急ぎで後へ戻つてみた。かれの推測は誤つていなかった。はたして、大勘は、この機会にすなおになつてはいなかった。

自分の縄尻をつかんでいる捕手を蹴倒し、源次も、腕はきかないが、親方の大勘と一緒に、死にもの狂いで、あばれ廻まわっていた。

近づくに従つてその様子が見えた土岐鉄馬は、いい所へ戻つてきたと一足跳とびにそこへ来るが早いか、

「おのれ、まだ無用な手抗てむかいをしているかッ」と、十手をもつて、骨ぶしの碎けるほど、

源次の肩を撲りつけた。——で、その途端。

「わッ……」

と、大地へ仆れたが、それは、打たれた源次ではなく、鉄馬であった。

後頭部から背すじへかけて、土岐鉄馬は斬られていた。傷が浅いので死にきれず、ウームとうめいたかと思うと、十手をつかんだなり自分の血の中をころげている。

「あッ」と、縄尻をほうりだして、逃げかけた捕手も、脛を払われて前へのめつた。残るひとりは、源次が夢中で蹴とばした足の先に、脾腹をかかえて悶絶した。

途端に——源次も大勘も、今まで性なくシビれていた両の腕が、ふツと自由になって、一時に早い血の脈をうってきたのに、われながら茫然とした。

その、茫とみはった目の前には、ひとりの美女が立っていた。艶とはいえないがすきとおる水のような美しさ、白い行衣を着た肌の白い黒髪の美女である。

「オオ、お綱さん！」

大勘は源次へ目くばせした。源次は縛めを切られた腕をさすりながら、あたりを見廻してかがまり込む。

「——弦之丞様と御一緒に、どこにおいででございました」

「ここで待ちあわすという約束なので、宵から上の森の中に、お前さんの蹠音あしおとを待つていました」

「あ、そのうちにこんな手違い？」

「源次が捕まったのも知ってはいたが、お前さんが来てからの思案と、森の蔭で心配しながら、息を殺しておりましたのさ」

弦之丞どうぎょうどうえと同行どうぎょうどうえ同衣の遍路にやつした見返りお綱。今——土岐鉄馬のうしろへよつて、浴びせつけた新藤五の小脇差をさげている。

それはまだ大黒宗理の手で研とがれてきたばかりの刀もの、斬つてもその切ツ尖さきに、口紅ほどの血も止とめていない。

「ここには海部の捕手が、また押し返してくるにきまっているから、お綱さんは、源次に道案内をさせて、ここの裏山を抜けて、赤河内あかかわちへお逃げなさい。あつしは、捕手に追われて行った弦之丞様の安否を見届けて行きます」

「ご親切だけれど、それに及ばない。弦之丞様は、わざと捕手を釣りこんで、麓のほうへ駆けだすから、後で三人はここから先に、土佐街道の寒葉かんばへ出て、そこで待ちあわしていただくとおっしゃったのだから」

「ですけれど、あの人数に囲まれちゃあ……」と、大勘が不安らしくいうのを、お綱は、微笑ほほえんだきりで、自分から先に裏山の道を上りだした。

そして、予定どおりに寒葉かんばの近くで、後から来た弦之丞と落ちあつた。かれの手甲と裾すその二所ふたところ三所に、黒い血痕けつこんがついていた。大勘は、怖ろしいような、不可解なような顔をして、歩をともしにしてゆく、その人の横顔を眺めていた。

土佐街道が白々と明けてきた頃——四ツの影は、牟岐むぎの上流から本道と岐わかれて、笹見ささみ、西又にしまた、入道丸にゆうどうまる、いよいよ深い奥海部おくかいふの山地へ分け入っていた……。

翌日。

こんもりした槇まきの森蔭で、わずかな眠りをとった後。

大勘はふところから一枚の山絵図を出して弦之丞に見せた。お綱もそばへ寄って眼を落した。剣山つるぎさんの山絵図である。

源次は森を出て見張っていた。こうしている間も、日和佐ひわさから殺到してくるであろう捕手の蹙音が聞えるようでない。

「まるで、道がないような所です」

大勘は、数日家を空にして、苦心して描いた山絵図を前に、あれこれと、細かい心おぼえを説明した。

かれが指さす図面に目を辿らすと、彼岸剣山の頂へ行きつくには、まだ重畳たる山また山が阻めている。

そま 柚かりようし 狛師でもなければ、通わない所が多い。

大体、剣山へのぼるべく、ここを選ぶのは順路ではない。だが、順路をとって行かれぬ二人の目的、ぜひがなかった。

弦之丞とお綱よりは、二日半ほど早く徳島の城下を出ている竹屋三位卿とほか三人組が、急いで行つたあの道こそ、剣山へのぼるに都合のいい表道。途中、お十夜の用で、川島に一日あまり費やしたにしても、かれらの一行は、やがて貞光口から塵表の巨山を仰いでいるに違いない。

かれは北、これは南、かれは表道から、ふたりは道なき裏にかかっている。

だが、その者たちが、自身より一足早く、甲賀世阿弥を殺しに向つているとは、もとより知らないふたりであった。

「何よりの心づけかたじけない」

大勘の厚意を謝して、弦之丞はその山絵図をふところに納め、追手の姿を見ぬうちにと、また一心に道を急いだ。ある時は、口もきかず、ある時は、行願ぎょうがんに向っているような汗をしぼっている自身に気づいた。

「剣山は……まだ？」

お綱はそういう言葉を、時折、大勘へくり返していた。

「まだ見えません」

……………。

「剣山は？」

「まだです」

清澄な空気、耳なれぬ禽とりの声、森々しんしんと深まざる山また山。行けども山である、行けども山である。

沢を下り、岨そぼをめぐり、わずかな山村を眺め、また奥へ奥へと歩みつづける。たまたま逢う樵夫きこりや部落の人も、遍路姿のふたりに、何の怪しみも持たなかった。

「あれだ！」

力のこもった声で、大勘がこう指さした。

四人は、星越峠ほしごえとうげを踏んでいた。

「えつ、剣山？」

「あれが剣山です。次郎笈じろぎゆうと矢神丸やじんまるの間から、肩を張りだしている山がそうです」

「アア、あの……」と、お綱も大勘が指さすところを指さした。

弦之丞も黙然もくねんと、ふたりの見まもる山を見つめている。お綱は何かの感慨に衝うたれて、白雲の流るる行く手に佇ちよりつ立した。

アア、あれが剣山か——。

そう思つて見た山は、父の姿を仰ぐのと同じ感銘を与えた。まだ見ぬ父の姿は、剣山を見て逢つたと等しい心地がした。

動こうともせずじつと山と直面しているうちに、お綱の目がしらは、涙でいっぱいになつてきた。涙で山が見えなくなつた。

（お父さん！ 生れてからまだ顔を知らないお父さん！ お綱はここまで来ているんですよ！ あなたに会いに、あなたが生涯をかけた仕事を活いかした）

声いっぱい、あなたの雲表うんびようへ、お綱は呼びかけてみたかった。

だが、直前に見えるようでも、まだそこへは数里、それも、これからはいっそう峻けわしい

峽谷や岩脈に阻まれてゐる距離がある。——でもお綱には、ここから呼べば、劍山の山牢から、オオと、返辞が木魂してくるような気がするのだった。

「では、大勘も源次も、どうか、ここまでとして、後へ帰ってくれるように」
弦之丞は、笠ぐるみ頭を下げて、二人へ礼をのべ、袖を別つことを宣した。

「気の毒な……」と、弦之丞はふと暗くなつた。さだめしこの者たちは、後で代官所の追捕に趁い廻されなければなるまい——。

「じや……どうぞ御堅固に」

と大勘も別れをつげたが、弦之丞のすまぬ色を見て、言い足した。

「お案じ下さいますな。あつしと源次は、これから土佐境の港へ出て、そこから抜荷屋の仲間をたのみ、しばらくどこかの島でほとぼりをさましております。そのうちには、四国屋のお家様にお目にかかつて、何とかいたすつもり、そこは手に職のあるありがたさで、尺金一本さし込んでいれば、どこの国にも天道様は照っております」

なおいろいろと、山へかかった場合の注意を残して、大勘と源次は後へ取って返した。

その後——やや久しいこと、お綱は茜色に変つてくる雲と山に明日を思い、弦之丞は、山絵図を按じて、山へかかる二つの道について考えている。

そこは廃寺の方丈のあとであろう。荒れはてているが、古ぶすまの白蓮びやくれんには雲母ぎらつらのおもかげが残っていた。古風な院作りの窓から青い月影がしのびやかに洩れている。

荒涼とした室内の、くもの巣だらけな欄間らんまや厨子ずしに、はげ落ちた螺鈿らでんの名残りが猫の目みたいに光っていて、湿しめっぽい妖気ようきを漂わせ、かびと土の香をませたような、一種いちゆの臭においが面おもてを衝つつ。

「明日のために」

との心がまえで、あれから峠を下りた弦之丞とお綱は、充分な眠りをとるべく、この廃寺へ入った。

眠ろう。眠らなければいけない。

お綱は経きよう 筥ぼこにもたれ、弦之丞は何か腰をかけて、杖に肩かたを支さえていた。しかし、しきりと旋舞せんぶする毒虫やバサと壁をうつ蛾がの音に、ふたりの神経は容易にしまらなかつた。

「明日は剣山にかかるのだ」

そう思う昂こうふん奮ふんも、よけいに眠りを拒んでいる。ほとんど、死の世界のような寂寞せきばくさ

も、かえつて心を冴えさせた。

うつうつとまどろんでいたかと思つた弦之丞も、やはり眠りつかれずにいたとみえて、不意に立つて、方丈を出て行つた。

しばらくすると、枯れ杉と樞かやの枝をつかんで戻つてきた。そして、所を見計らつて、その樞かやの木をプスプスと煤いぶしはじめた。

お綱の眠りつけないでいる様子を見て、蚊や毒虫を追つてやろうとする、弦之丞の心づかいであつた。うすくまつわう煙の情けが、お綱の身を和やわらかに巻く。

ようやく、虫の責め苦からのがれた。

だが、お綱はまだ眠れなかつた。

「弦之丞様、まだ夜明けには間がありませんようか」

「そちは少しも寝ないようだが」

「なんとなく気が冴えて」

「それはいけない」

「でも、ゆうべあの森で、だいぶよく眠りましたから」

いつそ夜の明けるまで語り明かしたいとお綱は思つた。弦之丞も眠られぬまま、つい答

え、つい話頭を向ける気持になる。

万吉はどうしているだろうか？ 常木鴻山こうざんもさだめし消息を案じているだろうか？ 松平左京之介様は、自分たちの吉左右きつそうを、首を長くして待っているに違いない。

そんな話。

そんな話からお綱は、お千絵様は——といって弦之丞の顔色を見た。

かれは、それなり黙然もくねんとしてしまった。

お綱は自分のつつしみを破つて、ふと弦之丞を憂暗ゆうあんにさせたことをすまなく思った。もとより、この人とお千絵様とは、切る、捨てる、ことのならない仲なのである。

生れた時から悲恋の宿命をもっている恋。咲かない土に芽生めばえた花、それが、自分の恋ではなかるうか。

普通の境遇きょうぐうの人なら、なんでもない、実父の顔をひと目見るということが、生涯最大な希望になるほど不幸ふしあわせな身には、恋にも、同じような恵まれない宿命をもっていた。

劍山へ行くまでの——この苦難の途中だけが、わずかに楽しい恋の時間だ。自分の恋のゆるされる道のりだ。そしてその恋も、あるものを超こえてはならない恋。

はかない！

こんなはかない恋があるうか。

父の世阿弥に逢うという、希望の彼岸ひがんに立った時は、恋人を、義理のあるお千絵様に返さねばならない時だ。

剣山のいただきは、お綱に最大な希望と最大な失望の二ツをもって待っている。人生の悲喜明暗ふたいろの雲がそこにはたなびいている。

弦之丞は沈黙をまもり、お綱は眠りを装よそおつて、思い悩む。

「ああ、もつとあの山が、遠ければいい……」剣山にいたることが遠ければ遠いほど、お綱の恋はこのままでいられる。よしやそこに、あるものを超こえるまでの強い力が結ばれなくても、ふたりの世界、楽しい旅が、お綱にはある。道が峻けわしければ峻けわしいほど、夜が暗ければ暗いほど、お綱の旅は人知れず楽しい。

しかし、もう二人は、剣山の裾すそまで来てしまった。苦難、迫害、ふりかえってみても、お綱には、なお短かつた心地がする。

明日あすは明暗の雲をわけて、間者牢に初めての父の顔を見る！ それも待たれてやまぬものだ、今でも、想像の父の顔が、眼の前にチラつくほどである。どういおう！ なんと名乗ろう！ 千々ちぢに乱れて涙ばかりを見あわすであろう！ そんな想像だけでも涙がわく。

と、かの女の乱れた胸に、微笑をそそるような空想がかすめた。

「死ぬという方法があるじゃないか。劍山へ行きついた後に、弦之丞様とふたりで死ぬのが、すべての幸福をもちつづける一番いい道じゃないか。死出の旅は長い！ 劍山へ来たよりは遠い！ そして静かで果てというものがない」

父に会った歎びの絶頂に、弦之丞とともに手をとって死のう。

そう思うそばから、また、一方の心は、

（お千絵を不幸に墜してもよいのか！）

と責める声とする。

劍山に行きついて、劍山の土になるのは、いわゆる、木乃伊みいらとりの木乃伊みいらになるの類で、弦之丞がここまでの苦難くかんも、結果は、無意味なものに帰してしまう。

ふたたび重囲の阿波を逃れ出なければならぬ。

その時になつて、初めて、父の名も闇から光明へ、弦之丞も一箇の武士として、栄光の江戸に迎えられる。

すべての、いい結果を呪つて、わがままな死の世界へ、弦之丞を導こうとする心を、お

綱は自身でおののいた。奔放になろうとする恋のわがまま——自我主義をおそろしく気づいた。

「そうはなれない、私の気性でもそうはなれない」

お綱は情熱と理智のたたかいかいにもまれて、固く睫毛まつげをふさいでいた。弦之丞には、静かに眠っているふうを粧よそおっている心の奥で——。

「生きねばならない」

と、つよく思い返した。

「目ざして上る時よりも、いつそうなまつしぐらで、剣山をのがれ出なければならぬ。死んではならない！ 弦之丞様を死なしてはならない！ そして父の世阿弥とその人を、義理あるお千絵に渡してやることを自分の本望としなければならぬ、それを、無上として歎ぶのが人間だよ、愛だよ！ ——じゃあ、お前はなんにもなくなるではないか？ 愛って、人間の一生って、そんなつまらないものでいいものかね？ そうさ、ほんとに空くうな話だ、だけれど、そうした自分を無にする気もちは、さびしいだろうが、まんざら悪いものじゃあるまい。私はそれを信じよう、考えてみればもともとから何もなかったお綱じゃあないか」

眠りを粧よそおつているまぶたから、いつか、涙……涙……涙……とめどなくながれている。
 南無大師遍照金剛——。

廃寺の内陣で唱える人声があつた。お綱は、今宵この荒れ寺に、自分たちのほかにも行き暮れた遍路が雨露をしのいでいるのを知つて、そつと、涙をふきながら弦之丞を見た。杖により、壁にもたれて、寂じやくとしてゐるその人は、寝ているのか、起きてゐるのか分らない。白い行衣ぎようえの裾すそを、櫃かやの煙えいがうすく這はつて——。

お綱は遠いところの、鉦かねと詠歌えいかの声に、思わず耳をすませられた。

ぎやく縁も

もらさで救う

ねがいなれば

巡礼道じゆんれいどうは頼もしきかな

南無大師遍照金剛——

その巡礼道の身ではないが、お綱もせめて、今の一時でも、その境地に安住して寝やすもうと念じた。しばし静かに口のうちに、あなたの詠歌の声について合せている——。

と、突然。

バリバリツと、院作りの窓を破り、おどり込んできた同心四、五名。

山支度をして十手をくわえ、まつ先に、豹のごとく飛びこんだのは海部同心の安井民右衛門。

「弦之丞、お綱、御用であるぞ」

と、雷声をつんざかせた。

アツ——と不意をうたれて、お綱が方丈の外へ退くとたんに、安井同心はピシリツと白木の杖で腹を打たれた。眠っているように見えた弦之丞が、咄嗟、そこを支えたのである。「ウム！」と気丈な安井同心、杖をつかんで奪おうと試みた。

白刃を仕込んだ杖！ 相手につかませておいて、弦之丞、合口に掛けていた指を弾くように開いた。

と杖はそこから二ツに別れて、アツというと民右衛門、鞘だけ持ってよろよろと後ろへ。そこを真っ向胸落し！ 切ツ尖はなお余つて、膝行袴の前まで裂いた。たじろぐ隙に、弦之丞は、死骸のつかんでいる鞘をとり、それを下段に、白刃を片手上段に持って、四、五たび廃寺の廊下を駆け廻っていたが、やがて、お綱の姿をチラと見て、庫裏の裏手へ飛び下り、大竹藪の深い闇へ、ふと、影をくらましてしまった。

けつびつおんみつしよ
血筆隱密書

間者かんじゃろう牢らうの柵さく外がいに、山番が焼飯かての糧かてをおいてゆくのを取りに出る時と、溪流けいりゅうへ口をそそぎにゆく時のほかは、洞窟どうくつの奥おくに陽ひのめも見ず、精と根を秘帖ひしやうにそそいで、ここに百四十日あまり、血筆をとつて岩磐の火皿にかがまったきりであつた甲賀世阿弥こうがよあみも、今はようやく疲れてきた。

疲れてふと洞窟ゆかの床ゆかへ身を投げて臥ふすと、昏々こんこんとして二日もさめないことがある。そんな時、頭とうしん心しんだけが錐きりのように研とげていた。書こうとする意気をもつ、これを書き遺のこすことによつて、自分は犬死をまぬがれる、隱密おんみつ生涯しょうがいの墓石が立つ、武士の本分をつくし得る。

で、書こうとして起つのである。けれどその意気はあるが、今は精根がつづかない。精根はしぼりだしても、筆を濡らす血がもう出ない。指、腕もと、股もも、かれの全身は油液あぶらを採とりつくされた漆うるしの木の皮かわみたいに傷だらけだつた。

十幾年もの間この山牢やまらうに生きて、たださえ瘦せ衰えていたかれは、血筆をもち初めてか

ら一層枯骨をむきだして、幽鬼のようになっていた。一行に精をきらし、半行に血が出なくなると、世阿弥は落ちくぼんだ眼を光らして洞窟の外へ出てくる。

そして、餓鬼のように、野葡萄や山苺を食べ草の茎を噛む。溪流にかがみこんで、小魚や水に棲む虫まで口に入れた。血を摂るべく食うのである。生きようとする本能よりも、筆にぬる血墨をつくるために食うのが、この場合の世阿弥であった。

ひと頃、山牢の近くに春を染めていた岐良牟草のむらさき花も散りつくして、真ツ赤な山神の錫杖や白龍胆や桔梗の花がそれに代っていた。かれはまたぎらん草にかわる色素をたずねて、それには事を欠かさなかつた。

ほんの常識的にわきまえていた本草学が、どれほど実際に役立ったかしかない。かれは自分の知識にある限りのことを今の上に応用した。そして、ともあれ、三位卿の落した小法帖形こほうじょうがたの海図の余白から裏へかけていちめん、微細な文字をもって埋めた。

もうわずかだ、もう五、六行。

そこまで辿りついてきて、世阿弥はふと、

「おれは死ぬだろう」

と直覚して、筆の穂をふるわせた。

「あとの五、六行を書きおえたとたんに、おれはバツタリ眼をおとしてしまふに違いない！ そんな気がする！ アア、あと五、六行だ」

かれは高い山の頂へついた時のような呼吸の逼塞をおぼえだした。指をやらなくても感じられるくらい、乱れた脈を搏つていた。

「アア、あと五、六行だ」

火皿の獣油がとぼりきれたのを機に、洞窟から這いだした。

ぐツたりと山牢の口によりかかつて、かれはしばらく目を閉じた。そのわきに合歡の木が立っていた。淡紅色の合歡の花と俊寛のようなかれの姿とは、あまりにふさわしくない対照であった。

尖つた膝へ手を結んで、独り語につぶやいた。

「ここで、おれのなすべきことだけはした」

だが？ ……と世阿弥はすぐに後の哀寂にうたれた態で、おそろしく光る、そして空虚な目を、的なく空に向ける。

血をしぼってなしあげた穩密覚え書の一帖も、江戸の大府へ送り届ける頼りはなし、このまま木乃伊となる肋骨に、抱いてゆくより道はないのである。

「それでいい」

かれは、諦めるよりほかない所へさびしい肯定を落して、

「それでいいのだ……」と重ねて、独り語をいった。

「やがて、おれの死に骸からあの一帖を見出した時には、阿波の武士たちも、いかに大府笹の間の隠密というものが、使命を奉じるに根強いものか、侍根性のない執着をもつものかを知って慄然とするだろう。そして、後には人の口からわしの最期も江戸表へ通じるであろう。しかし、それと共に、仲間で誇る隠密魂もおそらく、この世阿弥の終りと一緒に甲賀組にも亡ぶに違いない。世の中が変っている、わしが江戸を出た時からもう元和寛永の世の中ではなかった。それから十幾年……」

ふと、膝に落ちている合歡の花に目が行った——うす紅い合歡の花。

その優しい膝の花を眺めていると、かれの想像は、ふツと翅が生えたように飛んで、ふたりの可愛らしい少女をとらえてくる。

江戸表に残してきたお千絵であり、腹ちがいのお綱である。

もう二人の娘は、その頃の少女ではないと思っても、かれの想像はやはりあの当時の稚顔を描いてみせる。

「ふびんな娘たちよ……」

合ねむ歡の花は世阿弥のくぼんだ眼からポロポロと涙を呼んだ。

その時、一本の羽白の矢が、ヒュツ——とやじりひ鏃に陽の光を切つて、うつつな、かれの姿を狙つてとんだ。

「しまった！」

と、三位卿、素早く二の矢をつがえて向うを見た。

山牢のあるこぶやま瘤山の裾は、すそ覗き滝の深潭から穴吹の溪谷へ落ちてゆく流れと、十数丁にあまるさく柵が、その地域を囲っている。

柵外のまないたいわ粗板岩の上に立つと、あなたのほうに洞窟の暗い口と、合ねむ歡の巨木が見えた。

有村は、弓を構えてばんじやく磐石の上に立っていたが、

「ちイツ……」と舌打ちして、しぼりかけた二の矢、弓ぐるみ、ガラリと手から捨ててしまった。

「お手際」

と、下から賞めた者がある。

「皮肉を申すな」

と三位卿は、岩から跳び下りて、天堂一角、お十夜孫兵衛、旅川周馬、その三人の前へ立った。

「むごい殺し方をするよりは、ただひと矢にと思ったのだが、一の矢、襟えりもと二元をかすめて合歡の木の幹へ刺さってしまった」

「では、世阿弥のやつ、覚さとりましたな」

「ふいと姿を隠しおった。しかし、逃げられる場所ではないから安心じゃ」

「殺せつがい害しに来たのを知ったとなると、かなわぬまでも、さだめしジタバタするでしょう」

「なぶり殺しもぜひがない」

「衰えきつた老いばれ、大したことはあるまい。じゃ一刻も早く殺してやるほうが、せめて殺せつしょう生の罪も軽かろう。おい、天堂」

と、お十夜は先に立って、

「どこから柵を超えるんだ？」

「もつと上だ、この辺は一带に柵と激流が一緒になっているから、とても乗り超えてはゆかれない。もう少し上へ登ると、山の腹へかけて流れに添っていない所がある」

「よし！」と、周馬も前へ出た。

周馬の氣負きおつたうしろ姿を見ると、天堂はニツと笑った。決して、悪い意味ではなかつた。——この男も可愛いやつだ、そう考えて、和田峠で癩かんしゃく癩ざくまぎれに、煙管きせるをぶつけた時のことを思い出したのである。

「最初は、ひどく油断のならない男と考えていたが、決して、ムキになって憎むほどの人間じゃない。むしろ、愛すべき稚氣ちぎさえ持つているじゃアないか！　こうして世阿弥を殺すにも先に立ってゆくんだからな」

と、かれの背なかを眺めながらゆく。

お十夜は幾度も剣山を踏んでいるが、周馬は初めてなので、嶮けわしいのにあきれている、俱利伽羅坂くりからざかでもかなりヘトヘトになった。だが、ひと度冷ひややかな山氣さんきに面おもてを吹かれると、その疲れも忘れてしまう。

次の山容をあおぎ、谷をのぞいて、森々たる喬木林きょうぼくりんの間に、合歡ねむの木の多いのにも驚いた。和州多武の峰わしゅうとうにのぼった折に、この花の多いと思つた記憶はあるが、かくも幽邃うすいな光線と深い冷氣のうちに塵ちりもとめぬ神秘さをもつた花とは違つたように思われた。人を殺害せつがいしにゆく人間にも、山は冷寂れいじやくな反省と幽美な感激を与えている。けれど

人間はなかなかそれに浸りひたきらず、邪念なかなかそれには消えない。

すでに四人は、大刀に反りそを打たせて踏み登ってくる。

世阿弥の生命いのちは風前のともし灯。

さつき、かれがふと意識した脈音のみだれは、この兇事きょうじの来たることを肉体の持主に予察させた靈感の微妙であつたらうか。

「死ぬナ、おれは」

不思議にみずからこういった。

しかし、人間にさほど靈の感知がありうるならば、父子同じ血をもっているお綱の血のうちへ、世阿弥の今搏うつ脈音がひびいてゆかないものだろうか。

深夜、廃寺の方丈から、ふたたび徳島海部かいふの同心に追われた弦之丞とお綱は、あれから、
 深林、峽きょうこく谷をよじのぼって、剣山の裏伝いへかかったことは想像に難くない。

それは弦之丞が、医王山の境内でも廃寺の折でも隙を見るや一散に逃げ去ったことであ
 きらかに知れている。かれには、捕手とりても同心もない。ただあるのは、目指す剣山の山牢が
 あるばかりだ。

けれど、貞光さだみつぐち口から難なくここへ来た三位卿の一行と、道なき裏山の、それも山番の

目を忍び忍びくる彼とは、時間にして半日、嶮路けんろの不利にしてだいぶな差がある。

ただ、僥倖しあわせというべきことは、深更しんこうに十手の襲うところとなつたため、勢い、あのまま暁へかけて、道を急ぎにかかったであらうと察しられる一点。

そうすると、麓ふもとの見付役所で、山嵐の寝心地よく、遅くまで、熟睡してここへ着いたお十夜などよりは、ゆうに半日以上はやがの早駈けとなり、時間の差だけは取り返して余りがある。かれの消息については、漠然として疑懼ぎぐをもつただけで、徳島の城下を離れてきた有村や三人組、もとより間髪かんはつの差で、ここへ弦之丞とお綱がくるとは夢にも知らない。

急ぐうちにもどこか悠々として柵を越える場所を見廻してくると、やがて面前に見た急き坂ゆうはんの上から、早足に駆け下りてきた人物があつた。

四人が姿を隠したと知らずに、そこへ駆け下りてきた男、日除笠ひよけがさをおさえて、大股にゆくところを、いきなり跳びついたお十夜が、どこをすくったか、気味よく投げた。

「あつ！」といったが、日除笠、すつくと向うに立ったので、怪しい！と天堂や周馬が、いちどに三方から姿を見せると、

「な、なんだ！」

声はでかいが、案外なあわてぎま。

「貴様こそ何者だ、見れば、町人姿、山牢のあるこのあたりへ何の用があつてウロついている」

「じゃあ、あなたがたは蜂須賀家の……」と言いかけたが、町人、小首をひねった。総髪、十夜頭巾、顔の見えない編笠、見くらべて妙な顔をした。

「アー」と、そのうちに、後ろにいる三位卿を見つけると、あわてて、笠の紐ひもを解いて、

「そちらにいるのは、御城内のお公卿様、わっしは、徳島御奉行の下廻り、釘抜きひもの眼八という者でございます」

「オ、手先の眼八か」

一角は顔を見知っていた。

「あ、天堂様でございましたか、ひどい目に会わせますな、あぶなく谷間へ玉転がし、命を棒にふるところでした。だが……ああ、いい所で会ったもんだ」

胸板へ汗ビツシヨリ、押し拭ぬぐつて、笠を団扇うちわに、ほっと一息ついている。

「眼八」と、一角は素振りを見て、

「妙なほうからやってきたな、いったい何用があつてこの剣山へ来ているのか」

「ご存じはありますまい」と、眼八は、これほどのことを苦もなく話してしまうには惜しい気がして、

「何しろ大事おおごとになつたもんです」と、もつたいをつけた。

そうした後で、眼八は、事実の細要より自分の功を誇り顔に、弦之丞とお綱の行動を手にとるように話した。

その生死すら疑惑にしていた四人は、聞くにつれて開いた口がふさがらない。のみならず眼八の言によると、お綱と弦之丞のふたりは、星越ほしこえとこの山の間にあたる廃寺からのがれだして、遂に剣山の樹海のような森林へ影を隠してしまつたということである。

「で、なんでござんす」と、眼八は話の筋にひと区切つけて——「あつしは同心方と別れて、ひと足先に間道を登り、やつらの道に綱を張つておりましたが、なにしろこの通りな深山幽谷ゆうこく、町の捕物みたいなわけにや行きません。それにご承知のとおり土佐境から海部方面は、道が峻けわしい代りに、目付役所もなく、山番も手薄なので、案外楽に来られるということを実地に踏んできましたから、こりやあいけねえと、急に泡をくツて考えなおし、これから、原士衆はらしの詰めている麓ふもとの木戸へ行つて、この大變をお報しらせしようと存じ、急いで、平家へいけの馬場から降りてきたところでございます」

ひと息にいつて、汗光りの赭ら顔を手拭で拭き廻った。

「ではお綱と弦之丞めは、すでにこの山の深みへ入り込んでいると申すのじやな」

「多分……」と少し曖昧あいまいになったが、眼八、自分の見込みに誤りはないと自信をもつて、

「……そうだろうと思います、いや、こつちで下手へたを踏んでいると、いつ、この間者かんじゃろう牢へあらわれて、世阿弥を助けだそうとするか分かりません。なにしろ、ご要心なすつて下さい」

三位卿は混惑してきた脳髓のうずいをいきなり村正むらまさかなんぞの鋭利な閃刃せんじんで、スツカリと薙なぎ抜なけられたような心地がして、踏みしめている足の裏から、かすかな戦慄せんりつさえおぼえた。

「ここへやって来る以上は弦之丞も、死にもの狂いに違いありません。たださえ腕の冴えた奴、そいつが夜叉やしやになつて暴れ廻つた日には、とても、同心方やあつしの手では抑えがつかみません。どうか、よろしく一つお手配を願ねがひとうございます」

「そうか……」と、すべてを聞き終つた有村は、下唇を締めて、こうしてはおられないという焦躁しょうそうを、静かな動作のうちにゆるがせた。

「眼八、そちはこの足で麓へ急げ、そして山見付の溜りたまりへ急を知らせ、十分に、手分けを

しておくよう、この有村がいいつけじやと伝えるがよい」

「合点です、じゃ……」と、笠をかつぐのと目札を一緒に、釘抜きの眼八、汗の乾くまもなく、足を急がせて、俱利伽羅坂を降りて行った。

後に残った四人、何かヒソヒソささやいていたが、やがて、目配せをしあつて、柵の尽きる所から重畳した岩脈へ這い上がり、ヒラリ、ヒラリ、山牢の地域へおどり込む。

まだ七刻を過ぎたころ、黄昏には間のある時刻だが、剣山の高所、陽は遠く山間に蔭つて、逆しまに射す日光が頂にのみカツと赫く、谷、峽、山のひだなどにはもう暗紫色な深い陰影がつくられている。

咲き乱れている山神の錫杖、身を隠すばかりな茅萱などの間をザクザクとかき分けて、やがて小高い瘤山の洞窟へ這い寄った四人――。

お十夜と天堂一角は、抜刀を背後へ廻して膝歩きに、ソツと、穴の両脇から、息を殺して暗い奥を覗きこむ。

スウ――と下がついていた一本の銀糸に、びっくりしたらしい蜘蛛が一匹、岩天井へ手繰り上がった。

氷室ひむろのような冷気を感じながら天堂とお十夜孫兵衛、洞窟の奥へスルスルと這い進んで行った。

「ヤ、いねえぞ」

先へ向つた孫兵衛の声が、暗闇の突き当たりから、ガーンと響いて返ってきた。

「ナニ、おらんと？」

「ウーム、見えない」

「さてはほかへ隠れおつたな」

「隠れたつて、間者牢の柵、あれより外へは出られねえものを」

「こんな中に生きていても、やはり生命いのちは惜しいものとみえる。出よう、外へ」

手探りで後戻りをしはじめたが天堂一角、またひよいと気がついたように、

「どこぞ横穴へでもへばりついているようなことはあるまいな」

「いや、そんな隠れ場所はねえようだが……」

と答えながら、お十夜は後ろを眺めなおした。

しかし、なくはなかつた。

よくよく闇に眼を馴らしていると、妙な所が一カ所ある。

どんづまりの真ッ暗な岩壁が、右側へ少し窪みこんでいるらしい。その袋穴の漆壺みたいな狭い所に、人の眼らしいものがギリりと光っている。動かずに光っている。そして、孫兵衛を睨みつけている。

けれど、にわかになんかそれが人の眼だとは断定されない。なにしろそれ以外には何も見えないのである。で——孫兵衛は抜刀を後ろ廻しにひそめたまま、屈身を伸ばして、ジツと自分の息を殺した。すると、向うの呼吸が感じられた。世阿弥はやはりそこにじつとしていたのだ。

一角は、孫兵衛の最初にいないといったのを信じて、気早に外へ這い出していた。

「ふーん、すくみこんでいるな」と感づいたけれど、お十夜は、あえて助勢を呼ぼうとは思わない。

十年以上、日蔭干しになっている死にぞこない、そぼろ助広で一突きに抉るくらいはなんの造作もないこと。そう思っている。

しかし暗い、どんな得物を持って、どう構えているか見当がつかない。窮鼠猫を囓むということも一応思ってみる必要がある。ちよつと暗闇に眸が馴れてこないうちは迂濶に飛びかかれぬ気もした。

すると不意に、岩壁の窪みへじつとしたまま、目無魚のごとく動かずにいた甲賀世阿弥が、

「おおう！ ……」と、不意に、太い息をもらして、さらにまた低く、

「オウ……」と驚いたような声を繰り返した。

この暗所に棲みなれている世阿弥の眸は、自然生理的に、闇の中でも見とおしが利く筈だが、お十夜には、皆目、相手の見当がつかない。ただ、爛と射る双つの眼を感じるばかりだ。

「狂いだすな、こいつア。よし、そのほうが始末がいい」と、かれは世阿弥が呻いたのを、恐怖のあまりだと思つて、爪を立てて来る猛獣を待つくらいな覚悟をもった。

だが、相手は身ゆるぎもしないで、

「そこへまいったのは、川島郷に棲んでいた原士、関屋孫兵衛に相違ないと思うがどうだ」といった。

「あつ……」孫兵衛は、ズバリと気構えを割られて、思わず、見えぬ闇にムダな目をみはった。

「世阿弥！ てめえはどうしておれの氏素姓を知っているのか」

「知っておるとも、知っているわけがあるのだ！ 孫兵衛、お前もよく思いだして見るが
いい」

「思いだせ……ウーム、不思議だなあ……何しろそちの面がまるで見えない」

「もう一昔も以前のことだから、こっちの顔が見えたにしろ、或いは思いだされまい。わしも、わしを殺しに来た人間の前で、そんなことを思い浮かぶ筈はなかったが、フトお前の頭巾を見て思いだされた、その、じゅうや頭巾を見て」

「な……なんだって……」

頭巾といわれて、孫兵衛の声は意気地なくみだれてきた。

外の光線で見たら、面貌めんぼうまツ蒼さおに変つていたかもしれぬ。

世阿弥には、ありありとその態さまが見て取れた。

「因縁だな……」

かれはこう嘆じた。

「お前がおれを殺しに来る……まさか川島にいたあの孫兵衛が、わしを殺しに来ようとは……、ウウム面白い、冷ひややかに生死を超えて人の世の流転を観じれば、おれがお前に殺されるのも面白い」

「とすると、てめえはこの山牢へ捕まってくる前に、川島の村にも忍んでいたことがあるんだな」

「川島の郷さとはおろか、阿波の要所、探り廻らぬところはない。まだ誰に話したこともないが、徳島城の殿中にまで、わしの足跡が印しるしてある。そして、一番永く身を隠していた家が、孫兵衛、お前とお前の母親とがふたり暮ぐらしで棲んでいた川島の丘のお前の屋敷だ」
「えっ！ お、おれの元の屋敷にいたッて？」

「しかし、そうはいつても、隠密の甲賀世阿弥を、みつめていたでは、いつまで、考えだされる筈がない。十一年前、わしは阿波へ入り込むと同時に、すぐたに屋たみやに化けていたよ、紺の股引ももひきにお城半纏しろばんてんを着て、畳針つむぎのおかげで御普請ごふしんを幸いに、本丸にまで入り込んだものじゃ。そして、いたる所を畳屋の職人で歩いた末に、川島の郷さとで、元のお前の屋敷の畳代えにも雇われて行った」

「はて？ ……」孫兵衛には、まだ何を話されているのか思い当らない。ただしきりと気になるのは、世阿弥が頭巾の秘密を知っているらしい口ぶりである。

世阿弥は覚悟をしていた。死に直面しつつ話すのである。その態度は、姿に見えなくて

も、語韻ごいんに感じるので、お十夜も、殺すべく握っていた大刀を忘れかけた。

「——原士の屋敷はすべてだが、お前の屋敷も旧家でかなり広かった。わしは畳代えの職人で、名前はかりに六蔵ぞうといっていた。あの奥の十八畳の部屋、十二畳の客間、六畳の茶の間、十畳の書院」

孫兵衛は自分の旧屋敷の畳数を心でかぞえた。世阿弥のいうところ一畳の間違いもない。「そして、玄関、女中部屋、仏間だな。話はその仏間から起こってくる。その古いお厨ず子は青漆塗せいしつぬりで玉虫貝たまむしがいの研とぎ出しであつたかと思う、その厨子の前へ、朝に夕に眉目みめのいやしくない老婆が、合掌する、不思議はない、御先祖を拝むのだ。ところがそこから不思議が生れた、わしが、畳代えの手をかけた日に、敷きつめの工合ひらてをなおす響ひびきからお厨子のそばの柱がポンと口を開いた。ちようど、平掌ひらてが楽に入るくらい、切り嵌はめになつている埋木うめきがとれて落ちたのだ」

「ウーム、分つた」

「分つたろう」

「じやてめえは、それが縁になつて、半年ほど下男になつていたあの六蔵か」

「そうだ、お前の母親は、それからぜひ屋敷にいてくれという、わしも都合のいいことだ、

隠密甲賀世阿弥は当分下男ということに早変わりした。するとまもなくお前の母者人ははじゃひとが重病にかかった。うすうす事情を眺めていると、その当時、関屋孫兵衛というひとり息子、博奕ばくちは打つ、女色によしよくにはふける、手のつけられない放埒ほうらちに、それが病のもとならしかつた」

ガチャツと、何か金属的な音がしたので、世阿弥は突然言葉を切った。

すでに最前、合歡ねむの木の下で、鋭い鎌やじりにかすめられた時から、自分へも、俵一八郎たわらと同じ運命が訪れてきたなど直覚して、覚悟はきめているかれだったが、話し半ばに、剣の音を聞くと、やはりぎよつとして舌が吊りあがった。

見ると——世阿弥の眼で見ると——お十夜は大刀をつかんでいる手をにわかには、バツタリと前へついたのであった。その鏢つばの音だった。

で、言葉を次ごとすると、先に、岩穴を出た一角が、

「お十夜、何をいたしているのだ！」ととば口から奥へ言った。井戸へどなったように、その声が、おそろしく大きく響く。

孫兵衛はハツとして、大刀を持ちなおした。

しかし、声に応じて世阿弥をすぐに突き殺す気は出なかった。

今の話は、多分な好奇心もあり、後に、阿波守の耳へ伝えていい重要なこともあるが、何より、彼をたじろがせたのは、自分の母親のことを、世阿弥が話しかけているせいだ。あらゆる放埒ほうらつ、物盗り、辻斬りまでやって、なお恬然てんぜんたる悪行の甘さを夢みるお十夜だが、母を思う時、かれはもうい人間だった。不思議なくらい、その常識の一ツだけは、誰にも負けない善人孫兵衛であった。

もつとも、悪党の常として、お十夜も、母親のことなどは、おくびにも口に出していったことはない。よその母親が手を曳ひかれてゆくのを、後ろからバツサリ斬るくらいな無情さは平気で持ちあわす男であつて、自分の女親おんなおやのこととなることから意気地のない特殊な愛情の持主だ。

が、孫兵衛は、身辺の者や悪行あくぎやう仲間うななかまに、そんな微量びりような人情でもあることを気取られるのは、ひどく恥辱だと信じ、俱利伽羅紋くりからもんもん々の文身いれずみに急所が一カ所彫り落ちているような考えで、努めてまる彫ぼりの悪人を気どつていた。

後あとにも前さきにも、たつた一度、何に感じてか、その彫落ほりおとしの気持を口に洩はらしたというのが、木曾路へかかる旅籠はたごで、飯盛の女を買った晩、周馬と一角に向つて、

「おれもさまざまな女に逢つたが、いつまでも好きな女は、やはり、おふくろという女ひ

とりだ」

と、冗談まじりにいったくらいなもの。

今度七、八年ぶりで阿波へ帰り、劍山へ来る途中、郷里の川島へ立ち寄ったかれが、こ
ツそりと、屋敷裏の丸い墓石と逢ってきたことも、誰も知らない事実である。

で、孫兵衛は、たじろいだ。

世阿弥がまだ母親のことを何かいいそうなので、すぐに殺すのは惜しかった。

「おう！ 孫兵衛！」

一角がまたどなっている。

「おらんと見たら早く出てこい、手分けをして探さねばならぬ」

「待て」と、孫兵衛も奥から胴間声で、「ちよつと横穴を見つけたから念のためにあらた
めている」

「そうか、さてはそこだな」

「オイ、待て、入ってくるな」

「なぜ」

「怖ろしく狭そうだ。それより、ここはおれ一人でいいから、ほかを探してくれ、いなか

つたらずぐに出てゆく」

「ウム、じゃ入念に頼むぞ」

「ぬかるものか！ 周馬と三位卿は？」

「血眼でそこらをかき分けている」

一角の立ち去った足音を聞いて、孫兵衛はふたたび暗闇の眼へ問いかけた。

「だが世阿弥！ 初めにてめえは、おれの頭巾を見て思い浮かんだといったが、こいつア腑ふに落ちねえ。隠密から畳屋、畳屋から下男と、三段に化けてあの当時すましていた者にしろ、おれの頭巾のいわ曰くを知っているはずはねえんだが」

世阿弥の眼と孫兵衛の影が向い合つて、洞窟の奥の不思議な暗闇問答は、それからであった。

「わしがお前の頭巾の秘密を知らないと思つているのか」

と世阿弥がいった。するとお十夜も、ふと、

「あの晩は、おれとおふくろ、あとは身寄りだけだった」と古い記憶をよび起こした。

「いかにも、わしは使いに出されていた、吉野川を越えて向う地へ」

「その間に……」とお十夜はゴックと唾を飲む音を重苦しくさせて、「おれのおふくろは息を引き取ったのだ」

「世間の者は、不審とも気づかなかつたろうが、わしには読めた。なみの下男なら知らぬこと、かりにも大内府直遣の隠密、しかも棲み込んである家の中の出来事だ。その夜以来、孫兵衛、いつのまにかお前のその十夜頭巾が脱れないものになっていたな」

「おう、ではあの時、使いに出て行った後のことを？」

「いかにも、残らず見届けていた。お前の母が危篤というと、すぐに七人の肉親ばかりが集まった。そこは例の厨子のある仏間、出入りに錠をおろしあたりを見張り、そして、静かにお前の母の枕元をとり巻いた。……と、あの柱だな。切り嵌めにして妙なものを埋め込んであるあの柱だ。それより前に、わしが畳を敷き代えた日に、埋木の口が落ちた途端には、何か、燦然としたものを見たが、お前の母親が茶の間から飛んできて、妙にあわてて隠したものだ。その柱へ、臨終にのぞんでいるお前の病母は、枕へ頭をのせたまま、弱い眸を向けたようだ。そうして、あれを……という意味を見せると、寂としていた七人の中から、ひとりが立ってうやうやしく埋木をはずし……」

「ウーム……」

と、孫兵衛、頭の鉢をしんしんと締めつけられるように呻いて、

「もういい！ 話は止める」

突然、対手の声を打ち消した。

「世阿弥、おれはてめえを殺さなければならぬ。分っているだろうな」

「うむ」 自若として、

「この春、俵一八郎が殺られてから、わしにもやがてやってくるだろうと思っていたところ、観念はしている。だがの、孫兵衛、もう少し話してもいいじゃないか」

「つまらねえ」

「いや、愉悦だ、わしは話したい」

「おれはてめえを殺そうとしているのだ。殺されるこの孫兵衛と話をするのが、愉悦だというばかはあるめえ」

「この身を殺す敵でも悪人でも、こうして、世間の人間と口をきくのはわしにとると言いようのない珍しさだからな、まあゆるしてくれ、そこで今の話だが……」と、世阿弥は低い声音で、平調な言葉を自然につづける。

「——臨終の間際に、あれをと、お前の母親が、柱の隠し穴から取りださせたものを、細

い蠟細工ろうざいくみたいな手にふるえながら持った。白蛇はくじやの喉のどをおさえるようにつかんでいた。そうして、しばらく口のうちに、経文とくもんのようなことを唱となえていた」

「で、世阿弥、それをてめえは、いったいどこで見ていたのだ」

「——使いに出ると見せかけて、わしは天井裏ひそに潜ひそんでいた、甲賀流ちりの忍法、塵ちりも落しはしない筈だ。そこで息を殺していると、病人の指の間に小蛇の首みたいな形のもので、弱い灯明あかりにもさんらんとしている。と七人の肉親の者たち、みんなシーンと後ずさりをし、顔を上げる者はなかった。ああいう時には原土という者も、みな怖ろしく森厳だ、儀礼みだれず古武士のよう、ことにその晩の七人は、川島郷せうの原土の中でも、また特別な密盟みつめい組ぐみらしい、切ツても切れない因縁いんげんの仲間だ」

「やめろ、どこまで聞いてもくだらねえ、もうそんな思い出話でわなんざア聞きたくもない」

「わしにも、少し謎めいが残のこっている、まあ今しばらく聞くがいい」

「止めろというのに、くどい奴だ！ サ、殺ころしにかかるぞ」

「耳みみに飽あきたらその時に、黙もくつて、突つくとも斬きるともするがよい。世阿弥はここにかがま
ったきり、とても、逃にげる体力たいりきはないのだから。——でお前の母親ははだ、その時、絶たえ絶たえ
な息いきづかいで、お前に涙なみだぐましい意見をいつたな、後ご生しょうだと、わが子こに手を合あせて、改か

心を迫つたな。だのに孫兵衛、そちは邪悪の権化ごんげのように、一生悪事はやめられぬと答え
た」

「当りめえだ、死んでゆくお袋に嘘がいえるか」

「それはいい、悪党の率直もいいが」

「チツ！」と、舌打ちして「おふくろの幽霊みたいに、おれにいったい何を説とこうつてい
うんだ」

「十夜頭巾——」

と、世阿弥は暗黒の中で笑つた。

「頭巾の悩みとでも申そうか」

孫兵衛は口をつぐんだ。

暗闇の中の二ツの目はジイと白く真向きにすわつたまま、

「——お前が改心はできぬといきると、お前の母、死にきれぬ悶もたえを見せ、サメザメと
泣いて、孫兵衛よと呼んだ。孫兵衛よとまた呼んだ。お前は立たない、あの時の女親は怖
かったのであろう、で、病人は三度目に、お祖父様じいさま、どうぞ、孫兵衛をこれへ、と側にい

る老人へ眼で哀願した。名は知らぬが白髯はくぜんの老武士、あとで聞けば、川島郷の原士の長おさで、ひとたび、その老人に、あいつと杖を向けられた者は、たとえ、どう他国へ逃げ隠れしても、必ず手を廻して殺されるという、怖ろしい支権者しけんしゃであるそうな」

たかぎりゆうじけん
高木龍耳軒

のことをいうのだなと孫兵衛には分った。

それや龍耳りゆうじ老人は怖ろしいにきまつている。原士の長おさはあの人だから治まつているといわれているくらいなものだ。仲間の脱走者で、長崎の果てまで逃げたやつがあるが、老人はいながらにして、その男の首を見た。

孫兵衛も故あつて、他国へ出ていても、絶えず龍耳りゆうじ老人の監視をうけている身だから、すぐに頭脳あたまへピーンときた。

世阿弥はまた話しつづける。

「お祖父様じいと病人が頼むと、その老人が、黙ってお前の襟がみをつかみスルスルと母親の枕元へ引きずつてきた。と——お前の母の細い腕は、お前の首を強く巻いて、夜具の下へ押しつけた。その片手には、柱の隠し穴から取り出したさんらんたるものをつかんでいる。アツ、お前は悲鳴をあげて四肢しを突つ張る、同時に母は息をひきとりそうになった。ぎよツとしたが、周囲の者も、見ているよりほかなかつたらしい、白い蒲団ふとんは血で染まつた」

しばらく言葉を切つていたが、孫兵衛は、刻一刻と、世阿弥を突く機を逃がしていた。

「——まさに絶えなんとする息の下で、お前の母は、原士の長の老武士へ頼んだ。——孫兵衛が改心するまで月代をのぼすことはなりません。孫兵衛めに私のお祈りが要らなくなるまで、遺物に与えた頭のものをとることもなりません。この遺言を破つた時は、お祖父様、川島郷七族のため、どうか、お情けに孫兵衛を殺してやって下さいませ。でなければ一生このまま日蔭者にしてやつておいて下さいませ。子が可愛いからです。ほかの七人方も、お頼みいたします。こういつて最期の眼を閉じた」

「……………」はッ、はッ、と、聞こえるような息をついて孫兵衛は無言。

「と——原士の長、七人の肉親たちとともにしばらく黙禱をささげ、死者の前で厳然とお前にいい渡した。孫兵衛聞けよ、その与えられた恩愛の秘密をみずからやぶる時は、貴様、たとえどこに逃亡潜伏しても、必ず、五十日の間に命を奪るぞよ！ と……………」

ふと、落涙していたらしかったが、お十夜孫兵衛、いきなり猛然と、大刀の鏢ぶるいを見せて世阿弥の胸もとへ跳びかかった。

「ええ、果てしがねえ！ ぐずぐずしちやいらねえんだ、片づけるから覚悟をしろ」

「待て、もう一言」

「ちツ、未練を吐かすな」

「隠密根性といおうか、ここで、最期に一目見せて貰いたいものがある。わしも甲賀世阿弥だ、なんでこの期に見苦しい死にざまを望むものか。実をいうと、わしはその晩の有様を覗いた後から、お前のかぶり初めた十夜頭巾の下に、おそろしい興味と執着を持った、隠密の執着だ。得心のゆくまで見届けなければ気がすまぬ。しかも、頭巾にくるまれたお前の秘密は、やはり一つの阿波の秘密だ。江戸城へはいい土産、それをつかんだなら阿波から足を抜こうと、一念に、お前の頭巾の中を狙っていた。と、お前は放埒に荒んだ揚句、阿波を出奔して行方をくらし、わしは、原土の長に見破られて、とうとう、この剣山へ捕われの身となつてしまった。よくよくの因縁だ。そのお前が今日はわしの痩せ首を斬りにきた。で、古いことを思いだしたのじゃ……。しかし今、死の間際に、頼んであの時の秘密を見せて貰ったところで、何の役にも立ちはないが、わしが捕われの原因となつた物だけに、山牢へきた後も、自分の眼が誤っていたか正しかったか、始終気になつていたところ、人にはわからぬ隠密煩惱、死際の欲望に、ありありと、手にのせて見て死にたい。孫兵衛、わしのいおうとする中心はここだ、ひと目でいい、見せてくれ」

「な、何をだ？」

「その頭巾の下に隠されているものを」

「ばかなことを吐かせッ」

「嫌か」

「当たり前えだ!」

「じゃあ、話はそれまでのこと。殺るか、いよいよ」

「おう、催促がなくなっても殺してやる」

伸びた猿臂——

ムズと、甲賀世阿弥の襟もとをつかみ、右手の大刀をギラリと後ろへひいた。

その刹那だった。

突然、洞窟の口元にあたって、天堂一角がただならぬ絶叫と共に、地ひびきをさせてぶつ仆れ、山つなみでも来たように——。

「お十夜ッ、早く手を貸せ、一大事だ! 三位卿があぶない、周馬もッ」

「やッ、ど、どうしたって!」

「助劍しろ、早く! 法月弦之丞とお綱が来たッ——、法月ッ——うう……ム」

と、乱脈な声がすれ、すでに、そういう一角が、どこかへ一太刀浴びせつけられている

らしかった。

ふた声ほど絶叫して、天堂一角は岩牢の外へ仆れてしまった。

孫兵衛は足もとの大地がめりこむような響きにうたれた。かれの眼は頭巾の蔭にあわてきつた輝きをうごかせた。そうして、思わずつかんでいた者の襟もとを離して、

「くそうツ！ 弦之丞などに」

と、洞窟の奥から走り出ようとしたが、また思いなおして、どうせのこと、世阿弥を殺してから行こうと、戻りかけると、世阿弥は発作的に、突然、居どころから飛びあがった。

とがった肩骨がかれの胸を打った。上へ刀を振りかぶれる空間があれば、据物斬り、

ただ一揮ふりに割りつけること、孫兵衛の手になんの苦もないことだろうが、見当のつかない暗闇。

胸もとへぶつかったのを幸いに、孫兵衛は世阿弥の細いのだ首を左の腕へすくい込んだ。締めつけて脾腹ひばらをひと突きに——と思つたが、そうたやすくもゆかなかつた。

甘んじて死をうけるようであった甲賀世阿弥は、今の一瞬に、もの狂わしく変つて、

「わしは死なぬ！ わしはまだ死なぬ！」

とない力をふりしぼり、孫兵衛の腕から逃れようともがいた。

「じたばたするなッ」

「むむむッ、一刻ちがいつ……」

滅前の一燦、おそろしい念力で対手の腕くびへ歯を立てる。

白い刃は、世阿弥のわき腹に当てがわれていた。

かれの前歯が孫兵衛の肉へ入ってゆく力は、同時に抱かされた刃を食い入れる力となった。孫兵衛は腕くびの痛みをこらえつつしばらくソツとしておいた。

サーツと早い血汐が裾へ行つた。

「よかろう」

と、孫兵衛は思った。

強く刀をしごいて、平手で世阿弥の顔を押しすと、闇の中へドシンと音をさせて、仰むけになった目と歯が白い。

グウツと、一度腹をつきあげた傷負は、

「一刻ちがいつ……」

とまたいった。

そうして、ビク、ビク、と大動脈から息を吐き出すように痙攣する。

「とどめを」

と思つて孫兵衛が探りかけると、ふたたび洞窟の外で、お十夜、お十夜ツ、と三位卿と周馬の聲が響いて、あわたましい足音の重なってくるのを感じ、かれの手も心もますますうろたえたらしく、そのまま豹のごとく洞窟の外へ向つて駆けだしてきた。

頭の上から、明るい光線を浴びた途端に、孫兵衛はやわらかいものを蹴つて、もんどりを打ちそうによろけた。

蹴ころがされて、ウムと呻きながら立ち上がったのは、口元に昏倒していた一角で、正氣づいたが深傷を負っている、左の肩先から袖半身、染めわけたような紅である。

それにもぎよツとしたが。

外の有様を眺めるとともに、孫兵衛には天堂などを顧みている余裕もなかった。法月弦之丞がそこから見下ろされる傾斜に立つて、周馬と三位卿を相手に斬りむすんでいる！

月山流とやら薙刀の型はやるが、初めて、白刃对白刃の境に立った三位卿はしどろもどろだ。周馬とて腕にかけてはまことに頼りがうすい。いわんや、法月弦之丞の前に立つてをや。

ふたりは、何か高声をあげあっているが、弦之丞の剣前に近づくことはなしえないで、走れば追い、追われれば逃げ、そして、息の間に、お十夜お十夜ツ、としきりに助けを呼びつづけている。

なおあなたの柵さくと山際やまぎわとの境を越えて、ここへあせってくる武士の姿が見えた。

弦之丞とお綱とを追跡して、からくも駈けつけてきた海部かいふと徳島の役人、浅間、岡村、田宮の三同心。

その急なるを知り、またからまる二人をあしらいつつ、弦之丞は隙あるごとに、お綱へ向って叫びを投げた。しきりと手を振って急せきたてた。

「お綱ッ」

「あい」

お綱もかれに添って働いていた。

「ここはかまわぬ、山牢の安否を！」

「あい」

「早くゆけ！ 世阿弥殿と名乗りをしてこい」

お綱は夢中で側を離れた。

洞窟の黒い口がもう真上に！

三、四十間ぐらいの距離しかない！

新藤五の柄つかを固く右の手に、片手で草の根をつかみながら、上へ上へ、洞窟の口へと、かの女しよは汗と涙の力をつづけた。

いちど立ち上がった天堂一角は、また合ねむ歡の木の下へ仆れてしまった。何か声をかけたが、お十夜は返辞も与えないで洞窟の前から駈け下りている。

ドドドツと傾斜な地面を下りかけると、互いちがいに、向うの灌かんぼく木の間をかき分けて、懸命に登ってゆく白い影がある。

「や？」

と、急にそつちへ駈けだしてみると、振り向きもせず洞窟へ向って行くのは、白い手てっこ甲脚うきやはん絆をまとったお綱であつた。

「おうツ、お綱」

お綱はその声をすら顧みていなかった。必死に上へあえいでいた。

孫兵衛は幾百里の山河を越え、今ここまで会いにきたかの女の父世阿弥の血を塗つたば

かりの刃やいばを持つて、お綱のうしろへ追いかかった。かれは阿波へ来る前まで、ふたりの仲がどれほど密みつに深いものかを思つてみて、寝苦しい夜があつた。その後、あの暴風雨あらしの夜の狂瀾きょうらんに、死んだものとのみ信じた後はさすがに煩惱ぼんのうの霧が散つてせいせいとした気もちであつたので、今、お綱の姿を見ても、得ようとする念はなかつた、殺意のほうが強かつた。遂げえぬ悪魔の恋は、必然な、破れかぶれに變つたのである。殺刀さつとうの下もとに魂たま切らすことによつて、永い間の鬱怨うつえんを思い知らせてやろうとする。

追いつくと一緒に、孫兵衛、

「そこへはやらねえ」

と、背すじへのぞんで、助広の白光はっこうを一揮ふりなぎつけたが、崖に等しい傾斜であり、灌木の小枝に邪魔されて、行き方少し軽かつたか、

「あッ」

と、横ざまに走つた小脇差、女の力ではね返された。

「孫兵衛だね！」

「急いだところでムダだろう、甲賀世阿弥はたった今おれが殺ばらしてきたばかりだ。サ、次にはてめえの番」

「えーッ……じゃあ……」

山の根も揺るいだかと思うほど、仰ぎょうてん天してよろめいた身を、お綱はあやうく手で支ささえた。

「てめえにはまたさんぎツぱらな怨うらみもある、なぶり斬りにしてやらなければ、このお十夜の虫が納まらねえ。お綱、覚えていたろうな」

かの女じよが、何か叫んだ声を割って、サツと白い風がきた。上へと思つたが逃げきれず、後ろへかわした弾はすみにズズ——ツと七、八尺すべ迂り落ちる。

孫兵衛の下りてくる足もとを、お綱は新藤五の切ツ尖さきで待った。上の顔は嘲あざわら笑つて、構えをとりながら飛ぼうとする。

途端である。

「おのれッ！」と耳もとで。

はツと見ると、法月弦之丞、浅間、岡村の同心と、周馬、有村の四人を上へ上へとおびきよせて、それを捨てるが早いか、お十夜の方へ疾しつぷう風に来た。

迎えざるを得なかつた。孫兵衛はすばしこく刀を持ちかえた。これは四人を束たばにしたよりもこたえがある。

すでに、ここまで一同が吊り上げられてくるうちに同心のひとり安井民右衛門が斬り伏せられていた。それと、最も頼むべき天堂一角が弦之丞の姿を見つけた真ツ先に、機先を制せられて一太刀浴びてしまったのは、なんといつてもはなはだしい力を失っていた。頼むは孫兵衛だけといつてもよい。

弦之丞はたえずお綱を見ていた。四人を対手あいてにしつつ、かの女の身边を開くように開くようにと防いでいた。

「あッ、間者牢へ」

お綱がそれに力を得て、洞窟の入口へ近づいたのを見た同心の浅間丈太郎は、こういつて敵の劍前けんぜんを離れ、上へ這おうとすると、飛び寄った弦之丞の咬刀こうとうが、鋭く足をすくった。

丈太郎の体は雑木の茂っている所まで、一気に、俵のようころげて行つた。

「寄りつくものは一太刀ひとたちに薙ぐぞな」

徐々と力の練りだされてきた弦之丞は、丈太郎を斬り落した弾力で、さらに上へ踏み登った。

お綱はその後ろを風のようにすりぬけて、洞窟の中へ夢中で走りこんだ。

孫兵衛がああは言ったが、なお半信半疑であった。殺したぞといったことは、むしろ父がまだ生きている実証のようにさえ思えて、冥府よみのような冷たい闇へ飛びこむと一緒に、

「お父様——ッ」

と、叫ばんとした。

けれど、なぜか、幾百里をあえぎあえぎきて、この山牢まで達してみると、父娘おやこ名乗りをしないうちに、父とは呼びかけ難い気がして、のどをつまらせながら、

「——江戸からお綱がまいりました。甲賀こうが世阿弥よあみ様！ 甲賀世阿弥様！」

と、固い言葉で、続けざまに呼び立てて入ったが、深い闇は冷々れいれいとなんの答えも与えない。奥のほうからガーンと返ってくるのは、おのれの口真似まねをする穴山彦あなやまびこ。

ふいに、お綱の足のくるぶしをつかんだ手がある。

洞窟の一番奥であった。

はッと、よろめいた弾はずみに、ヌラリとした岩いわ苔こけに手をすべこらせて、

「よ、世阿弥様!!」

何がなし、ぞっと毛穴をよだたせて、つかまれた足を抜こうとすると、だらりと重い感

じがそのままついてもち上がる。

と。

「ううウ……」

人の呻うめきだ、弱い、苦しそうな息……。

お綱は血を騒がせながら足元を探った——手ざわり？——一個の人体？——が、硬こわく横よこになつてゐる。

わなわなした指先が、その冷たい顔から胸を撫でて行つた。

骨ばつた老人の四肢し、誰？と疑つてみるまでもなくお綱はつづけざまに名を呼んで、腕の中へ抱きあげた。

夢中で、よろぼうのように、洞窟を後へ戻りだした。だが、口元の明りを見ると同時に、ギクと足をすくませてしまった。

「敵かたきは？」

外へ気を研とぎすまして、

「弦之丞様？」

と、そこの激しい乱らんじん刃を想像した。

ままよ！

必死な気もちでお綱は新藤五を構えながら、薄暮はくぼの白い明り目がけて走りだした！ と、その勢いの余りに鋭く、まっしぐらな姿は世阿弥の体と縊よれて、合歡ねむの木の根元まで泳いで仆れた。

あたりを見廻すと——いつのまにか、別の所のように変っている。

いちめんな霧だ。

漠ぼくとして山も樹木も見えない、ただ西の方に夕照ゆうでりの光だけがボツと虹色を立てている。微小な水粒みずつぶは、睫毛まつげの先にギヤマンの玉のように光って、息づまるような乳色の気流がムクムクとゆるい運動を描いてゆく。

どうしたろうか？ 弦之丞、そのほかの者の影も見当らない。耳をすきましたが、霧の中にも、それらしい叫びを聞かない。

お綱は身を起こすと一緒に、世阿弥の顔をむさぼるように見つめた。

世阿弥は目を開いていた。

深傷ふかでだ、眸ひとみは虚空こくうにすわってうごかない、だが、何か言いたそうに、唇がかすかに歪ゆがむ……。

お綱は、お十夜の一言を思いだした。そして、さすがに取り乱した。

「お綱です！ お綱でございますよ！ 分つて下さい、気を……気をたしかにして下さい」
「アア、と心をくじきかけては、また、

「お父さん！」

と、耳へ口をふるわせて、

「お綱ですよ——ッ」

涙まじりの金切り声かみなぎになった。

「ウーッ……」と少し通じたらしい。世阿弥の手が、目の先の白い霧をつかむようにした。

「お……」

「分りますか！ 分りますか」

「……………」

「お父さんッ」

「……………」

ゴクリと喉のどの骨がうごいた。と、少し楽な呼吸がふつと洩れて、ニイとお綱を見て笑つた。

「あなたの子のお綱です、江戸表から……あ、逢いにきました」

「ウ……ム」

「お千絵さんも、私のように、無事に向うで成人しております。お分りになりますか、わ、わたしの顔が……わたしの……」

世阿弥はひとつうなずいた。

そして、ふところから例の血筆けつぴつの一帖じょうをとりだして、お綱の手へ持たせて、

「こ、これを」

とかすかにいった。

「え」

「江戸へ」

「ア……御遺書ごゆいしよ？」

「弦之丞の手へな」

「わかりました」

「と……」

「ハイ」

ぼろぼろと湯玉ゆだまのような涙が走る。お綱は拭こうともしないで、

「ハ、ハイ……」と声を曇らせた。

「折があつたら……関屋孫兵衛の」

「才、下山人、きつと、仇を討たずにはおきません」

「いや……」

違っている！

と、いうように、世阿弥はかぶりを振ったが、その途端が——もう最期だった。

「ず……頭巾の……」

と舌を巻くように言ったきり。

「あつ、お父さん」

「……………」

水！

お綱は夢中で駈け下りた。

白い片袖に、流れの水を濡らして帰ってみると、もうまるで世阿弥の顔が変っていた。けれど、その死顔は満足していた。

だが、禍わざわいはまだあった。

今、水をしめしに行つた留守に、世阿弥のそばへおいた大事な秘帖ひじょうが、わずかな間に失なくなつていた。

原土はらしの長おき

麓ふもとから仰げば、山の中腹を、一朵だの白雲が通つているのであろう。

その霧が過ぎぬうちは山牢の前から遠くを見渡すことはできないが、ふと気づくと、さして隔へだててもいない岩の間を、ひとりの男が這つてゆく。

そこに見えなくなつた秘帖を、涙の目で探していたお綱は、霧をとおして怪しい男の影を認め、

「盗んで行つたな！」

と直覚した。

急いで、父の亡骸なきがらを洞窟の内へ隠し、向うへ這つてゆく男をつけた。

駆けるかと思ひのほか、男は、振り向いても、なお、這つていた。奄々えんえんとした息で――

近づいてみると、くつきよう屈強な武士、しかし、肩にどつぷり朱あけをにじませている。

最前、お十夜が走り出した時、足にかけられて、草の根に呻うめいていた天堂一角だった。かれには、ふか深傷ながら、まだ這うだけの気力と意識があつた。

一角は、今の際に、世阿弥のそばから血筆の秘帖をつかみとり、はッ、はッ、と荒い息づかいで這いだした。

同じように這いかがみ、足音をぬすんで、お綱は後ろへ寄っていった。

おのれ、おのれ、おのれ。

心のうちで叫びながら、一太刀にと狙い廻した。

一角は熊のように、岩から岩の上へ攀よじてゆく。三位卿はどうしたろう？ 周馬はどうしたろう？ 声をあげて呼ぶ力はなし、霧は深い。

さ颯ツ——と不意。

風をつらぬいた白い条すじが、一角の後頭部へ消え込んだ。

お綱が斬っていった新藤五！

はずれても肩——或いは背すじへ切きツ尖さき下がり。

と思うと。

ズンと、刀だけ、岩へ深く、斜めに立つてしまった。

肩越しに腕をつかまれ、お綱は一角の前へ投げられている。どつちも死し身にみ、組むなり火のような息を争って、秘帖を奪とり返そうとする！ 渡すまいとする！ 組んではもつれ、伏せられては突っぱねる、一方は女、一方は傷負ておい、天堂勇ゆうなりといえどもなにしろ前から痛手がある。お綱は江戸女の勝気とはいえ、やはり女だけの力である、力量公平げんさに滅げん殺いされているのでいずれともいえない、秘帖を中心に双鷄そうけい羽毛うもを飛ばすありさまだ。

* * *

めつたにないことだ。

原はら土しの長龍おさりゆうじ耳みみ老人らうじんが出かけるなんて稀有けうなことだ。

第一、吉野川の上流平和な地域にそんな事件がかつてないせいもあつたらうが、なにしろ、龍耳りゆうじ老人らうじんが出張でばつてくるなんてまことに珍らしい。

ごう——ツと空が鳴っていた。

夕方、真つ白に隠された剣山は、夜になって、すっかり霽はれていた。

「秋が近いな」

空の銀河を仰いで、老人は白い髻ひげの先をかじっている。

「山へ入ると秋の音が聞こえるよ」

誰も返辞のしてがない。

老人の前には松たいまつ明が二本、うしろには人影が四、五、黙々として歩いてくる。剣山の山路である。今日の夕方のすさまじい光景が目に残っている。そしてまだ、法月弦之丞が捕われていない。

あの死をきわめた颯さつそう爽たる白びやくえ衣の影が、いつ檜ひのきの蔭から、閃せんじん刃とともにおどり出さない限りもない。

老人のほかの者には、秋の音も銀河の壮麗もない様子、ザワというたびごとに、足の関節かぶせがはずれそうになる。

その中に伍ごしてきた、お十夜と旅川周馬さえ、龍耳老人の案内としてついているのだが、眼底に異様な緊張をただよわせ、まるで、仮面めんのように顔の筋をこわばらせていた。

「やあ、これは」

と龍耳りゆうじ老人、杖を指してうしろの者へ、

「つまずくなよ、またここにも一人斬やられている」

「は。明りを」

松明たいまつを呼び返して、供の原土が、死体を抱いてズルズルと後戻りに、道のわきへ片寄せ、

「今の男は、木戸へ変事を報しらせに来た、目明しの眠八がんという者です」と歩きながら告げた。

「目明しか」

杖をコツコツ運ばせながら、

「どうも十手を持った者で、終りのよかったのはすくないようだな」

「ああ、また斬やられています」

と、松明が止まる。

「これで四、五人目だな、もう片づけるのは明日あしたにしよう」と死骸を廻って歩きかけたが、ちよつと小腰をかがめて、

「ウーム、なかなか立派に斬やられている」

首を振ってテクテク登りだした。

山は追々おいおい深くなる。しかし、龍耳老人りゆうじ、壯者そうしやにまけない足どり、何かぶつぶつ言つていた。

「——法月弦之丞のりづきげんのじょうとやら、たとえ夕雲せきうんの使い手にしろまさか天魔神てんまじんでもあるまいに、遠巻きにするの山狩のと、いやはや仰ぎようさん山千万だ。その上、この老人をわずらわすなどとはお話にならない沙汰……まあまあこんな事件は、蜂須賀家の御記録にも態ていよく省はぶいておくことだな」

耳が痛いのは孫兵衛だ。

周馬は黙つてついて歩いた。昼の元気もどこへか、少しも意気があがらない。

——洞窟の前で、弦之丞を取りかこんだ時、三位卿と周馬がもう少し腰を入れこめば、自分の力でも、きつとどうにかしたものを。と、お十夜は、今もそのいまいまいさが胸に消えない。

眼八が、ワツと原土をすぐつてきた時には、もうどうにも手がつけられなかった。霧が来たのも悪かった。

弦之丞はそれに乗じて、存分に行動した。眼八も斬やられ、原土の中にも沢山な傷負ておいが出た。霧がはれた頃には、夜になって、姿を探すすすがもない。

こうなると、地理は彼に利で衆には不利。ひとまず山番小屋の評議となり、異論まちなちという所へ、ひよつこり来あわせた龍耳老人が、耳を掘りながら聞いていて、

「これよ、若いのが、劍山は渭城のお庭より少し広いぜ」
と笑った。

山狩評議を諷したのである。

「どれ、おつくうだが行つてみてやろうか」

深夜にかけて押し出した。

といったところで、人数は六人、それも途中で返す約束の案内に過ぎない。ただし、三位卿は賢く同行をはずした。おそらく老人の前ではわがままがふるまえぬからであろう。

「だいぶ来たな、ウム」

「俱利伽羅坂でございます」

「ちよつとくたびれたよ。やはり、年は年だな」

「吾々でさえ、この通りな汗ですから」

「おいよ」

「はい」

「ご苦労だが後ろへ廻つてくれ」

「はっ」

「松明はわしが持つてやる。腰を押せ、腰を」

供の原土がうしろへ廻つて老人の腰へ手を当てがう。高野の尻押しこうやの故智こちに習つて、老人は楽そうに押されてゆく。

そうして、山牢もだいぶ近づいてきた。ふと仰ぐと、削り立けずつたような絶壁が前にあつた。

「おう、この上だな、間者牢は」

「さようで」

と、孫兵衛が応じて――

「ここはちようど、あの山の背にあたつています」

「どこかで水音が高くするな」

「しばらくゆくと流れがあり、それに沿つて十町あまり登りつめます。するとやがて間者牢さくの柵さくが見えるはずで」

「そうか」と、老人は杖を止めた。

「——ご苦労だった、これから先はひとりでもよろしい、お前たちは帰ってくれ」

「しかし、もう少々先まで」

「懸念けねんには及ばんよ」

「危ぶむわけではございませんが、お差しつかえなければ、せめて、弦之丞の姿を見つけるまでも」

「いや、かえって邪魔だよ」

手を振って、独り先へ歩きだしたが、一、二丁足を進めるごとに、杖を立て、間者牢の山をふり仰いでいた。

老人のうしろ影を見送って、旅川周馬は、

「なるほど剛腹ごうぶくなおじいさんだ」

と、舌をまいて、

「なあお十夜」

「ウム？」

「深夜しかもこの深岳しんがくだ、弦之丞のやつは山にこもって、血に狂したやぶれかぶれ、人

と見たらもうもく盲目に斬りつけるだろう。とても、吾々にもあんな勇氣はないよ」

「そうさ、困った老人だて……」

何が困るのか、孫兵衛の返辞はすこし意味をちがえて、

「あの分じや、どうも当分は死にそうもねえ」

と、頭中の重さをふと気にしていた。

そんなことをいって、ただひとり間者牢へのぼって行った影が、うすい夜霧にボケるまで、一同見送つてはいたが、誰も、

「あの老人が、ちがたな血刀を下げたびやくえ白衣の影にパツタリ行き会つたらどうする気だろう？」

とは心配をしていない。

りゆうじ龍耳老人の胸には何か、しかとした方寸ほうすんがたたみこまれているものと信じて、少しも行く先に危惧きぐを感じていないようであった。

「ここに待つていてもしかたがあるまい」

龍耳老人の目を放れて、お十夜はすこしのンびりしたようなふうで、

「オイ周馬、三の木戸の番小屋まで行って、明方までわら藁ぶとんでもかぶろうじやねえか。

どうせ今夜でなくても、袋の鼠、片づくにや決まっている弦之丞だ、ふもとぐち麓 口さえ縫いこ

んでおけば、何もあわてることはない」

松明たいまつがとぼりきれたので、ふたりの原士は、スタスタ先へ下ってしまった。

孫兵衛も踵くびすをめぐらして戻りかけたが、周馬の相槌あいづちがきこえないので、ひよいとふりかえつてみると姿が見えない。

「おい、どこへいったんだ！」

—— 奴、先へいつてしまったのかしら？

気がついて、にわかに大股にあゆもうとすると突然、切ツ立てになつた断崖の下で、

「孫兵衛！ 孫兵衛！」

と急せきこんで呼ぶ声がある。

「おう、周馬？ ——」

—— 闇をすかして、

「なにをしているんだ、そんな所で、先のやつは下ってしまったぜ」

「また、ここにも一ツ、死骸を見つけたのだ」

「ほうッておきねえ、どうせあした、麓のやつが片づけるだろう」

「だが……待てよ、少し……」

半身埋まるような雑草の中に立つて、重そうに死骸を抱きあげているらしい。

「……あつ、天堂だ、やつぱり天堂一角だぞ、この死骸は」

「そんな所で絶息していたか」

「才才、来てみたまえ」

かれが、弦之丞の第一刃をあびたのは知っていたが、日没、木戸へも集まらなかったの
で、どうしたのかと思つていた際だ。

周馬とは江戸表以来、お十夜とは、ことに永い交際の仲。

かれはよく周馬やお十夜の安価な女色漁りを軽蔑して、討幕の拳の成功を信じ、
事なるにおよんでは、何万石を夢みていた小なる光秀みたいな男だった。

悪友か善友かしらぬが、道中などでも、ふたりが痴話に更けているまん中の部屋で、ひ
とり猪八戒みたいな寝相をして、朝の鏡に目をこすり「わるい悪戯をしやあがる」と顔
の墨汁をあらう落して怒らぬところもあつた男だ。

まさか、捨ててはおけない。

「残念なことをした」

と、孫兵衛も飛んでいった。

「もう氷のようだ……」

悲壮な姿をして、周馬は、やつとのように死骸を前抱きにして、深い草むらを、ひと足ずつまた跨いでくる。

「この断崖から落ちたのだな……」

「高いな」

と、周馬もふりあおいで、

「じゃ、合図があった時、傷手いたでながら飛びおりて、麓ふもとへ下ろうと思ったのだらう」

「いや、自分で、こんな所から跳ぶはずはねえ。間者牢の山つづきだから、日が暮れて、うっかりすべにり落ちたにちがいない。……重いだらう、周馬」

「足がつかえて困る」

「よし、手を貸そう」と、孫兵衛は側へ寄って行ったが、あさましい姿をみると、衝うたれたように立ちすくんだ。

周馬の抱き方がまずいので、乱らんびん蒼白の死者が、グタツと襟えり骨ほねを尖とがらせて垂れている。

ひと言。

「オイ」と、声をかけてみたい気がした。

額ひたいへ手を入れて、孫兵衛、グーと無理にもちあげてみると、目をねむって、青蠟あおろうのよ
うな冷たい死顔、頬と耳のうらあたりに、爪でひツ搔いたような赤い筋……。と見ると――

口が裂けたように、白い前歯が何かくわえていた。

一帖じょうの血書！

いきなり、死首しにくびの齒から、孫兵衛がグツとそれを引ツたくつたので、周馬は重さの
めりながら、すばやく、白眼はくがんにお十夜の手もとを見つけて、

「オイ！　なんだ、今のはツ」

と死骸を下へ捨ててしまった。

一方。

龍耳りゆうじ老人は達者な足どりで、まないた岩の辺まで登ってきた。

なんたる寂寞せきぼくさであろう、無辺な天地だろう。

足もとの闇から黄泉よみの府にまで続いているのではないかと思われる。群山すべて低く白

い曳迷は雲である。

仰ぐと。

けむりのような銀河をかすめて、星がひとつ流れた。老人は歩をとめて、しばらく、草のそよぎを聞きわけている。

じつと……

「? ……」

行きくれた盲目のように。

ありとも思えぬくらいな微風が、老人の姿にあつまってヒラヒラする。白い髯——骨ぐみのすいてみえる麻の両袖。刀は、鎧どおしのような短いのを一本、前ざしでなく、わざと横へ。

……てく、てくとまたいつか歩きだしていた。

「ここだな」

間者牢の柵わきへ来ると、例の奔流がドーツと耳をうった。山牢の穴も柵の中も見えない。見えないが老人は、そこで、夕陽時の修羅のすごさを眼に描いた。

かれは、夜もすがらここを歩こうとするのか。歩いて夜の明けるのを待とうとするのだ

ろうか。

かくて、一刻半ときはんばかりも、その辺にたたずんでいた。

何事もない。

強しいて天地の変移をさがせば、霞かすみのような星雲が消えて、特に大きな星がひとつ、西に目立っていたことである。

「はてな……？」

ピタ、ピタ、と夜露をふむ自分の足音を聞きながら――

「ひよつとして、自刃したかな、所詮しよせんのがれぬことは分っておるからな……だが、いや、自害はしまい。よく侍というやつ、都合のいい潮時にいさぎよくという言葉で、結尾けつびの責任をのがれるものだが、自身で命を絶つような弱腰では、最初から、ここへ入ってくる資格がない」

と……つぶやいていると、かれの行くてに、いつか、薄いふたつの人影がうごいてくる。はツ……と思うと、向うも足を止め、老人も歩みを止めた。ザザザと茅かやをなでてる風が、うしろから押すように吹いて通った。

しばらく、うかがいあっているうちに、ふたつの影のうち、ひとりこつぜんは忽然と、岩の蔭

か草むらの中へでも隠れてしまつたらしく、やがて、近づいて来た様子のは、ひとりしか見えぬ。

龍耳りゆうじ老人も、のそ、のそ、と前へ足を運びだした。そして、双方の間、二、三間げんまで寄りあつた。

で、星明りでも、互いにその姿を明瞭に認めえた筈である。

ことに、先のは白衣びやくえなので、いつそう老人にはつきりと輪廓りんかくが見てとれた。

その上、白い袖の端や裾すそに、点々と、血汐らしいものが滲にじんで見え、白木の杖しろきをつかんでいる。

法月弦之丞であろう！

いち早く、弦之丞が隠したのはお綱という女にちがいない。

こう胸のうちで、龍耳老人、うなずいていた。

おれを何者と思つているだろう？ どういう態度でかかってくるだろう。抜き打ちにくるか、突いてくるか？ 老人はちよつとそんな興味を感じていたが、すぐにまた一步前へ出て、

「弦之丞、腰をおろせ」

と不意にいった。

錆のある老声だが、ヒツソリした大気にひびいて、いかにも雷喝らいかつしたようだった。

そしてすぐに、先で安心するように、自分から岩の上へ、ゆつたりと腰をすえてみせた。しかし、弦之丞は立っていた。

カチ、カチ、と燧鎌ひがまを磨すつて、首をかがめこんでいた老人の耳の裏から、香りのある煙がゆるく這った。

「ちと、話がある」

吸いつけたその煙草を斜ななめに持つて――

「若者、まずそれへ、腰をおろしてはどうか」

と木の根を指した。

弦之丞は不審にたえぬように、

「何者？」

と見つめている風であった。

しかし、血に狂きやうしているだろうなどといった周馬や孫兵衛の臆測おくそくはあたっていない。

老人の目にも案外なくらい、そこに立った弦之丞は冷静であった。むしろ、常のかれよりは沈鬱ちんうつな影さえ持つていて、みじん、心のさし迫っている様子はなかった。

——あれから、日没頃のひどい霧がはれて夜に入った後。

かれとお綱とは、前の洞窟で落ちあつていた。

弦之丞はかの女の無事をまずよろこんだ。

けれど、お綱はあの際、とうとう傷負ておいの一角に死にも狂いに振りほどかれて、絶壁の岩角いわかどから、大事な秘帖ひじょうとともに、かれの姿も見失ってしまったので、悲嘆と絶望にくれて、世阿弥の亡骸なきがらにすがつていた。

血筆けつぴつの秘帖？ 世阿弥の遺書？

「江戸へ」

といったという、最期のさまを思いあわせてみても、それは必然に、大府だいふへ届けよという、かれが鏤骨るこつの隠密報告だな、ということは弦之丞にすぐうなずけた。

「心配はない」

かれは、かれにすら自信のもてない言葉で、お綱を励まそうとした。

「一角が絶壁から転落したものとすれば、当然、骨をくだいて落命している。夜が明けた

ら、道を探つて尋ねてみよう……」

そうはいったが、ぎょうてん 暁 天の光を見たなら、ふもと 麓から孫兵衛や有村が、原士のあらうて 新手をすぐつて、ここへ襲せてくることは分つていた。

といつて――

半生を無明むみょうの中に送つて、不遇な生涯をとじた甲賀世阿弥の亡骸なきがらを、そのまま涙なく打ち捨てておく気にもなれない。あんたん 暗澹たる洞窟、また悲惨ではあるが、隠密の靈壇れいだんとしては、むしろ、こうげ 香華の壇にまさるかもしれない。

ふたりは、半夜の黙待もくじをした。そして、世阿弥の死骸を剣山の深くへ隠した。

「秘帖をさがし当てたとしても、それを携たずさえて、どうして、この重囲を脱出することができるか？」

次の問題はそれであつた。

一難、また一難。

これには、さすがの弦之丞もわくのう 惑悩している。

生きるはやすい。

この山に無為な生命をつづけようとするならば、やしま 屋島の浦からい 祖谷へ落ちてきた平家の

余族のように、それはいとやすいことに思える。しかし、麓の手配りを破る策は絶対にな
い。

それは、きょうまでの受難を、ひとまとめにしたよりはまだ難事だった。

山つづき、祖谷いはやの棧橋かけはしをよじ越えて、土佐、讃岐さぬきの国境をうかがおうか。

それも至難。

第一お綱にたえられまい。

ふたたび海部路かいふじへ戻るは下策げさくである。

ただわずかに弦之丞の誘惑を感じるのは、最難関と思われる貞光さだみつぐち口の木戸を斬り破つ

て、徳島の城下へまぎれこむ。——だが、剣は守るべく、頼るに絶対のものではない。

要するに、絶体絶命！ それが二人の足をのせている運命の石だ。

どう転落してゆくか？

天意だ、もういちど、明日あすの変化を待つてみよう。弦之丞はそこに意をすえて、星のう

ごきに夜明けの近いのを知った。

で——麓の木戸から新手あらたての声があがらぬうちにと、まだ真つ暗であるが、天堂一角の死

骸を断崖の下に探そうとして、お綱と一緒に来たところであった。

そこで、龍耳老人りゆうじと行き会った。

無論、油断もしないが、騒ぎもしない。弦之丞は、じつと、奇怪な老人を見つめていた。「若者、腰をかけたらどうだ」

と、老人は煙草をくゆらしている。枯淡だが憎いくらい落ちつき払った態度だ。

「まず、お訊ね申そう」

弦之丞もピツタリ前の岩へ腰をのせた。今はもう双方の顔の筋すじのうごきまで見て睨みあった。

「ウム、問わつしやい」

さりげなくはいったが、老人の身ゆるぎに、キツと構えたところが見えた。

「そこもとはいずれの人か」

「川島村、ほか七郷の原士の長おさ、高木龍耳軒と申すものじゃ」

「原士の長？ ……ウム、して、拙者に話があると申したが、何の用でここへまいった」

「問うまでもない！」

煙管きせるを斜めにかまえて、龍耳老人、古武士のように豪放な口調、膝びらきになって胸を張った。

「おぬしを討ちにまいったのじや」

かれの熒けいとした眼は、やがて、弦之丞の面おもてに、ゆるい微笑が彫られてくるのを見た。

——慮外である、と冷酬れいしゆうして答えざるように思われた。

老人は、そこで一だん声を張った。

「不敵な東方の間諜かんちよう！ もはやもがいてものがれぬところだ、岩を噛んで飢うるよりは、いさぎよく死をうけるツ」

そういつていながら、かれは、足もとへ火繩を置き、スパリスパリと煙草をくゆらしている。

弦之丞にも、これは、ちよつと不解な対手あいてであつた。本気か、威嚇いかくか、解げしかねていた。

「老人、拙者に話といつたのは、その儀か」

「いや、以上は要旨だ、今申したのは宣言だ。その前に、一言いつて聞かすことがある」

「才、聞こう」

「ここまで登つてくる途中でも、犠牲にえになつた幾人もの斬口てぐちをみたが、汝、あたら天稟てんびんの才腕をもつて、時勢の反抗児となり、幕府の走狗そうくになつて、無為に終るのはつまらんで

はないか」

「武士の心事しんじ、山家やまがのものにはわかるまい」

「ふうむ……小賢こさかしい。——王道を暗うし、民人に苛政かせいをしき、徳川門もん葉ようのおごりのほか何ものも知らぬ幕府の隠密となつて、その小さなほこりをば、おぬし、俯仰ふぎよう天地てんちにはじぬ心事とするか」

「だまれ」

かれの声も、勢い、やや激調をおびた。

「そちなどに、答える限りでない」

「逃げを張るな、弦之丞！」

「なにッ？」

「なんじ、燈火の恩を知つて、太陽の恩を知らぬはずはあるまい」

「尊王の美しき仮面めんをかぶるな。禁門の御衰微ごすいびを売りものにして、身を肥やそうとする曲し者ものの口癖」

「たとえ、仮面めんでもいい、偽善めいぜんでもいい」

「恥じろ、その醜しゆうろう陋ろうな自分の本心を」

「皮と肉とをはいでは生きられない人間だ。どこまでこね返しても、表裏のない人間と世の中はつくれない。要は、今の混沌たる暗闇政道をただして、まことの天日を仰ぎたい。それは、万人の要望で、正しい声だ」

「いや、乱をのぞむ、戦賊の鳴り物、山家そだが、都へのし出ようとする方便に過ぎない」

「あれは木曾義仲、時代がちがう。ばかっているぞ、よく胸に手を当てて考えてみる、幕府が何ものだ！ あれは王廷の番頭で、番頭でありながら、主家をないがしろにし、民税をくすね、巧妙な組織のもとに、十余代二百幾年、ていよく栄華をぬすんできた悪の府ではないか。——その妖雲にわずらわされて、月顔はれたまわぬは主上である」

「では訊ねるが、その徳川が仆れたなら何が代る？」

「王政が変わる」

「権をとつて廟に立つものが、第二の幕府をつくりはせぬか」

老人、グツとつまつたが、強情に、

「いや、いったん王道の赫たる御政道がたてば、そういう虫ケラどもが業をする日蔭はない」

「迂遠うえんでござる、お考えがちがう」

「ともあれ」

「イヤ！」と押しかぶせて、

「——法月弦之丞は学徒ではござらぬ。また憂国の士でもござらん。弱い人間の微情にひかされ、武士という形づけられた意気地に押されて、ここに立った一個の放浪者——、世せ潮ちようを口にする資格はない」

「では、その情といい、意地というのは？」

「恋もある、泣かぬ涙もある。凡人弦之丞、愚痴はてんめんでござる。話すのも聞くのはわずらわしかろう。——意地といえ、二百年來、江戸の禄ろくを食はんだ家に生まれた江戸の武士、このきずなをどうしよう！ いや、それはもう、清濁せいだくの時流を超え、世潮せちようの向こ背うはをも超えてどうにもならない性格にまでなっている」

「ウーム……では、戦国に戻って天下は割れる、紛乱ぶんらんする」

「割れるでしよう、禁門方きんもんがた、徳川方」

「いったん、泥と血とがこね返って、新しい世が立てなおる、王政は古もとにかえる」

「しかし、易々いひとは渡しませず、うけ取れませまい」

「なんの、大したことがあるものか」

「その偉業が成る前には、蜂須賀家ぐらいの大名、三家や四家は、狼火のろしがわりにケシ飛ぶであろう」

「ウム」うなずくと見せて――

突然。

「こうかッ！」

と叫んだとたん、ズドーン！ と不意に切った火ぶた。

翼つばさを搏うつた鸞らんのように、飛びしきつた龍耳りゆうじ老人の手には、黒檀柄こくたんえに銀鉞ぎんびようを打つたスペイン型の短銃たんじゆう！ 真綿まわたのようなけむりを曳ひいて持たれている……。

「あッ……」と弦之丞。

仕込しこみの山杖、ヒュツと虚空へは抜けたが、白衣びやくえは丹花たんかをちらしていた。

「……痛ウツ……つつつ……」と朱あけを片手に抱きしめながら、硝煙しょうえんを離れた姿は、ド
ンと、仰むけに地ひびきをうった。

「やッ？」

かなたに隠れていたお綱は、自分の心臓を射ぬかれたように身を弾はじいた。

弾たまけむりのうちに、弦之丞が仆れたのを見て、龍耳老人はぼろりと手から短銃をとり落した。

いかにも疲れたらしい様子が、今になって、かれの呼吸にあらわれた。

「才、夜が明けてきたな……」

空を仰いでいた老人は、すぐにうしろの崖がけぶち縁をのぞいて、

「次郎、まいっておるか」

と、誰かを呼んだ。

すると——思わぬ所から思わぬ人間の答えがあつて、そこへザワザワとわけ登ってくる男がある。影のように離れたことなく、耳目じもくとなり手足となつて、老人の信頼あつい次郎とよぶ若者であつた。

「まいっております」

と次郎、主人の前へ、墓がまのようにうづくまつた。

「……あれは？」

「これに持参いたしました」

肩からおろした具足櫃ぐそくびつを眼で示すと、老人は篤とくと見て、きげんよくうなずいた。

「弦之丞の仆ひょうひょうれているそばへおいてゆけ。……ウム、よかろう、その辺で」

かれは飄々ひょうひょうと歩みかけた。弦之丞を射つた得意や思うべしである。五、六歩、何か微吟びぎんに謡うたいのひとふしを口ずさんでいた。

——声もかけぬ狂刃きりよくが、いきなり暁ぎょうあん闇あんからおどつたのはその時である。颯然さつぜんたる技力ぎりよくはないが、必死！と感かじられる小脇差せきざしの切ツ尖さきが、うしろから老人の鬢びんをかすつた。

ピシ——ツ！

白鬢はくぜん風かぜになびいて、杖は横なぎにうなつた。

「ちイツ……」と齒がみを洩れる口惜くしやくしまぎれ。

「エエ、お、おのれ……」と、打たれてもやまず、狂わしくも、一念必死な女の影！

無論、お綱である。

血相、なんといおう、夜叉やしや、鬼女、なお言まいたりない勢いであつた。およそある場合の覚悟はしていたものの、目のあたりまに、弦之丞が短銃の一弾に仆れたのを見たお綱が、こ
うなるのは当然であつた。

だが、あいて対手は龍耳老人、かなわぬまでもと、見返りお綱の捨て身に斬ってかかる刃は、二度まで、三度までむなしく空を打たされて、なぶるがごとく後ろへよろけると、

「——汝もかッ」

と、かしやく仮借なき杖はふたたび持ちなおされて、お綱の新藤五を一撃に叩きおとした。そして、なお身を跳ばしてかかる脾腹をのぞんで、ウムと、左突きの拳がのびた。

とたんに、次郎はお綱のうしろから組みついていた。しかし、その必要はなかった。もうなんの反抗もなく、まなじりを吊りあげたまま、お綱は次郎の腕にグウと反つて、だんだんにその力も四肢から抜けていった。

「……離せ」

老人が顎をすくうと、次郎は、手を放してうしろへ退いた。

お綱の体は、かれの足のほうへ仆れて、霧の中へ繭糸のように捻れて寝た。

ききょう桔梗の花の芯から夜が白む。あたりの暁闇はひと風ごとに淡くなった。無念をのんで目をふさいだお綱の顔へも、水のような微光が這っている。

見ると。

その顔に、むぎんな涙の痕があった。

「……ぜひがなかった」

龍耳老人はこうつぶやいて、鼻息をみるように、ちよつとお綱の唇くちのあたりへ手をやっていった。

そして、そのまま、次郎をうながして立ち上がった。

「間道かんどうからお帰りになりますか」

「いや、いや、昨夜の道から」

「では、こちらのほうを下くだりますか」

「おい、次郎よ」

「はい」

「お前だけは、間道から帰らなければいかん」

「あ、そうでした、では……」

目礼して次郎はスルスルと谷間たにあいへ入ってしまった。まるで、葉裏へかくれてゆく蜘蛛くものように。

見送って、老人はすがすがしい朝風を満腹に吸った。そして、一顧こするとそのまま黙々と麓へ去った……あとは、有明けを啼なく虫の声がひとしきり。

……ふと。

お綱は舌に苦い味を知った。

冷やかな朝の冷気が、薄荷草はつかそうを噛むように口へ流れこんできた。

「お……」と意識づいて、身を起こした時に、一粒の気つけ薬が喉のどを通ったことを自身も知らない。

かの女じよは、手にふれた新藤五を拾いとつて、仆れている弦之丞のそばへ、いざり寄った。暁あけの空の下に見た恋人の鮮麗な血は、お綱に美しい誘惑であった。

嘆きとか、悲しみとかいうような、ふだんの感傷は起こらなかった。むしろ微笑したいくらいな不思議な心の淵ふちに立っていた。

かの女は、今はじめて許されたように、男の顔へ頬ほずりした。頬と頬を重ねたまま、流るる涙を拭かなかった。飽あかずに恋人を抱きしめた。

そして、自分の乳房を男の胸で圧おされながら、袖にくるんだ新藤五の冷やかな切さきツ尖に見とれた。

白い襟のどくびを仰向させる……。

喉のどへ！

突こうとすると——手が利かない。いつか弦之丞の手が下から自分の腕くびを握っている？ ……。

お綱はそれを錯覚ではないかとあやしんだ。

けれど、弦之丞の手は、しかと自分の腕くびをつかんで離さない。待て——というらしく、喉へやろうとする刃の手もとを握り止めている。

龍耳老人の短銃にうたれて、弦之丞が一弾に絶命したものと早合点したのは、旋風のような危機に吹かれて、何より先にお綱の心そのものが、平調を欠いてしまった証拠だった。

さすがに、お綱ほどの女も顛倒していた、血が逆上っていた。

弦之丞の撃たれた箇所は、右胸部の上、腕のつけ根に寄った所で、一時、仆れたものの、急所ではなく、起てない程の傷手ではなかった。かれは、その瞬間かすかながら、対手がすぐと次に、止刀を刺しに近づくであろうという意識をもって待っていた。

だが、老人は不解な行動に移っていた。弦之丞も傷口の出血を抑えきれず、霞にぼかされてゆくように気が遠くなった。

お綱に胸を押されて、気がついた。ほとんど無我に、刀の手をつかんだのである。弦之丞が目をみひらくと、お綱は何か大声で叫んで、夢中な手で扱帯を裂き、朱になつたかれの腕根をギリギリ巻きにする。

弦之丞はなすままになつていた。

しばらくして、やっと身を起こすと、まだらな血の痕に、草の実がいつぱいついた。かれの面は、まだ青白かつたが、どこかに氣力の熱が燃えかえつてくるようであつた。

と——そこに。

龍耳老人の残して行つた謎のような具足櫃が、人の疑目を待っていた。お綱もあやしさにうたれて見つめあつた。

蓋はすぐに開いた。

軽いものだつた。

のぞいてみると、意外、中には二ツの天蓋と、二掛けの掛絡と、鼠木綿の小袖や手甲までがふたり分？

いうまでもなく虚無僧の宗装、なんの意味でか、尺八までが添えてあつた。

いや、まだ解せないものが、それに添えてある三衣袋の中にあつた。阿州普化宗

院派僧の印可を焼印した往来手形である。それは、身をつつんで遁れろといわんばかりな品である。ふたりは哑然として、相手の心を汲みかねた。

こうして、自分たちを徒勞に空手で江戸へ帰そうという心か？

ならば、止刀を刺す機会があった。またことに右腕のつけ根をえらんだ狙撃も腑に落ちない。

でなければ、わざと恩を売って、隱密方の執着をにぶらそうとする策だろうか？

そう考えるのもあまりにうがち過ぎる。要するに老人の底意は不可解である。けれどもた弦之丞には、相手の意志などはどうであろうとよかった。そんなことは眼前の道草だ。

問題の末だ。

目的はまだ達しられていない。

世阿弥がお綱に託した隱密遺書はどうしたろう？ 一念、奪り返さずにはおけないのはあの血筆の一帖だ。あれをつかんで遺志をとげないうちは、命のある限り、闘わなければならない。

「お綱」

やがて弦之丞は、しつかりした声音で、かの女を見る目に愛熱の火をこめた。涙ぐまし

いくらいな情思をかくありありと彼が見せたことはなかった。

「お綱！ お前はどんな危地に迫ろうと、決して、この弦之丞より先に死んではならぬ。拙者には、何かしら靈感れいかんというような自信がある。きつと、あの秘帖は奪り返してみせる。サ、今日はどこかへ姿を隠そう、この傷の血さえ少し止まれば……」

と、立ちかけたが、お綱がその膝に顔をうツ伏せて、泣いているのか、離れる様子がないので、また言いつづけた。

「よいか、お綱、拙者が秘帖をそちの手に返してやったら、お前はあれを持って江戸へ帰れ！ そこには、お千絵殿の幸福やら、甲賀家の榮はえやら、お前の亡き母の靈もまた、みんな、微笑をもつて待っていていよう。必ず、短気を出して、世阿弥殿の託たくにそむいてはならぬぞ。わしとて、そちが阿波をのがれる姿を見届けるまで、必ずみずから死を招くことはいたさぬ」

この上にもお綱の意志を強めようとほとぼしる言葉のうちに、死を覚悟している弦之丞の心がほのめいた。

お綱は咽むせんで叫びたかった。

いいえ、弦之丞様！ わたしはあなたとこの国に死んでこそ幸福です。本望です。なん

であなたを残して帰る江戸表にうれしい微笑ほほえみが待っています。

青空文庫情報

底本：「鳴門秘帖（三）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1989（平成元）年10月11日第1刷発行

2009（平成21）年2月2日第21刷発行

※副題は底本では、「剣山《つるぎさん》の巻」となっています。

入力：門田裕志

校正：トレンドイースト

2013年2月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鳴門秘帖

剣山の巻

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 吉川英治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>